

河原に打ち立つて、昨日斬る所の頸共、皆懸け雙べて註いたれば、六百三十餘人也。その中に天台座主明雲大僧正、寺の長吏圓慶法親王の御頸も懸らせ給ひたり。是を見る人涙を流さずと云ふ事なし。木曾の左馬の頭都合其の勢七千餘騎、馬の頭一面に束むけて、天も響き大地も動く計りに、鬨をぞ三箇度作りける。京中又騒ぎあへり。但し是は悦びの鬨とぞ聞えし。

去程に故少納言入道信西の子息宰相長教、法皇の渡らせ給ふ五條内裏へ參つて、門より入らんとすれば、守護の武士共赦さず。案内は知つたり、ある小屋に立ち入り、俄に髮剃り下し、墨染の衣袴著て、「この上は何か苦しかるべき、開けて入れよ」と宣へば、その時赦し奉る。泣く泣く御前へ參つて、今度討たれ給ふ人々の事、一々に申したりければ、法皇、「明雲は非業の死すべき者と、露も思し召し寄らざりしものを、今度はたゞ我が如何にも成るべかりつる御命に代りたるにこそ」とて、御涙塞きあへさせ給はず。同じき廿三日、三條の中納言朝方の卿以下、四十九人が官職を留めて、追ひ籠め奉る。平家の時は四十三人をこそ停められしか。是は既に四十九人なれば、平家の悪行には猶超過せり。松殿の姫君取り奉つて、關白殿の掣に推成る。其の日又木曾の左馬の頭、家の子郎等召し集めて評定す。抑義仲一天の君に向ひ進らせて、軍には打ち勝ちぬ。主上にや成らまし、法皇にや成るべき。法皇に成らうと思へども、法師に成らんもをかしかるべ

し。主上に成らうと思へども、童に成らんも然るべからず。よし／＼さらば關白に成らうと云ひければ、手書に具せられたりける大夫房覺明進み出で、「關白には大織冠の御末、執柄家の君達たちこそ成らせ給へ。殿は源氏にて渡らせ給へば、それこそ叶ひ候ふまじ」とぞ申しける。さらばとて、院の御廐の別當に推成つて、丹波の國をぞ知行しける。院の御出家あれば法皇と申し、主上の未だ御元服なき程は、御童形にてまし／＼けるを、知らざりけるこそうたてけれ。

去程に鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝、木曾が狼藉静めんとて、範頼義經に六萬餘騎を相副へて、差し上げられけるが、都には軍出で来て、御所内裏皆焼き拂ひ、天下暗闇と成りたる由聞えしかば、左右なう上つて軍すべき様もなしとて、尾張の國熱田の邊なる所にぞまし／＼ける。北面に候ひける宮内判官公朝、藤内判官時成、この事訴へんとて、尾張の國へ馳せ下り、この由かくと申しければ、範頼義經、「これは公朝の關東へ下らるべきで候ふぞ。その故は、子細を存ぜぬ使は、返して問はるゝ時、不審の残るに」とぞ宣ひける。今度の軍に所從皆落ち失せ、討たれにしかば、子息宮内所公茂とて、生年十五歳に成りけるを相具してぞ下りける。夜を日に續いで鎌倉へ馳せ下り、この由訴へ申されければ、鎌倉殿、「是は鼓判官が不思議の事申し出で、君をも惱し奉り、多くの高僧貴僧をも失ひける事こそ、返す／＼も奇怪なれ。是等を召し使はせ給はゞ、こ

の後も天下の騷動絶ゆるまじう候」と申されければ、朝奏この事陳ぜんとして、夜を日に續いで鎌倉へ馳せ下り、梶原平三景時に附いて、様々に陳じ申しけれども、鎌倉殿、「しやつに目な懸けそ、應答なせそ」と宣へば、日毎に兵衛の佐の館へ向ふ。終に面目なくして、又都へ歸り上り、辛き命生きつゝ、稻荷の邊なる所に、幽なる體にて栖ひけるとぞ聞えし。

木曾西國へ使者を立て、「急ぎ上らせ給へ、一つに成つて關東へ馳せ下り、兵衛の佐討つべき由」云ひ遣はしたりければ、大臣殿を始め奉つて、一門の人々は皆悦ばれけれども、新中納言知盛の卿の異見に申されけるは、「縦ひ世末に成つて候へばとて、木曾などに語らはれて、争か都へ上らせ給ふべき。十善の帝王三種の神器を帶して渡らせ給へば、甲を脱ぎ弓の弦を弛いて、是へ降人に參れと、申させ給ふべうもや候ふらん」と申されければ、大臣殿其の様を御返事ありしかども、木曾用ひ奉らず。入道の松殿殿下、木曾を召して、「清盛公は悪行人たりしかども、希代の善根をし置いたればにや、世をば穩しう二十餘年迄保ちたんなり。悪行計りにて世を治むる事はなきものを、させる故なうて押し籠め奉つたる人々の官途共、皆赦すべき由」仰せければ、一向荒夷の様なれども、隨ひ奉つて、押し籠め奉りたる人々の官途共、皆赦し奉る。松殿の御子師家公、その時は未だ從三位の中納言にてましくけるを、木曾が計らひにて、大臣攝政に成し奉る。折

節大臣あかざりければ、徳大寺殿その比は、内大臣の左大將にてましましけるを、借り奉つて、大臣攝政に成し奉る。何しか人の口なれば、新攝政殿をば、借の大臣とぞ申しける。同じき十二月十日の日、法皇をば五條内裏を出だし奉つて、大膳の大夫成忠が宿所、六條西の洞院へ御幸成し奉る。同じき十三日歳末の御修法始めらる。その日除目行はれて、木曾が計らひにて、人々の官加階、思ふ様に成し置きてげり。平家は西國に、兵衛の佐は東國に、木曾は都に張り行ふ。前漢後漢の間、王莽が世を討取つて、十八年治めたりしが如し。四方の關々皆閉ぢたれば、公の御買物をも奉らず、私の年貢も上らねば、京中の上下、只少水の魚に異ならず。危ながらに年暮れて、壽永も三年に成りにけり。

卷第九

小朝拜

壽永三年正月一日の日、院の御所は大膳の大夫成忠が宿所、六條西の洞院なりければ、御所の體然るべからずとて、院の拜禮も行はれず。院の拜禮無かりければ、内裏の小朝拜も行はれず。平家は讃岐の國八島の磯に送り迎へて、年の始めなれども、元日元三の儀式事宜しらす。主上渡らせ給へども、節會も行はれず、四方拜もなし。腹赤も奏せず。吉野の國栖も參らず。世亂れたりしかども、都にては流石斯は無かりしものとぞ、各宜ひ合はれける。青陽の春も來り、浦吹く風も和かに、日影も長閑に成り行けど、只平家の人々は、何も氷に閉ぢ籠められたる心地して、寒苦島に異ならず。東岸西岸の柳、遅速を交へ、南枝北枝の梅、開落已に異にして、花の朝月の夜、詩歌、管絃、鞠、小弓、扇合、繪合、草盡、蟲盡、様々興ありし事ども思ひ出で、語り續けて、長き日を暮しかね給ふぞ哀れなる。

宇治川

同じき正月十一日、木曾の左馬の頭義仲院參して、平家追討の爲に、西國へ發向すべき由を奏聞す。同じき十三日、既に首途すと聞えしかば、鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝、木曾が狼藉靜めんとして、範頼義經を先として、數萬騎の軍兵を差し上せられけるが、既に美濃の國伊勢の國にも著くと聞えしかば、木曾大きに驚き、宇治勢田の橋を引いて、軍兵共を分ち遣す。折節勢こそ無かりけれ。先づ勢田の橋へは、大手なればとて、今井の四郎兼平、八百餘騎にて指し遣す。宇治橋へは、仁科、高梨、山田の次郎、五百餘騎で遣しけり。一口へは、伯父の信太の三郎先生義教、三百餘騎で向ひけり。去程に東國より攻め上る大手の大將軍には、蒲の御曹司範頼、搦手の大將軍には、九郎御曹司義經、宗徒の大名三十餘人、都合その勢六萬餘騎とぞ聞えし。

其の比鎌倉殿には、生食、磨墨とて、聞ゆる名馬有りけり。生食をば梶原源太景季類に所望申しけれども、一是は自然の事の有らん時、頼朝が物具して乗るべき馬なり。是も劣らぬ名馬ぞ」とて、梶原には磨墨をこそ賜びてけれ。その後近江の國の住人、佐々木四郎の御暇申しに參られたるに、鎌倉殿如何が思し召されけん、「所望の者は幾らも有りけれども、その旨存知せよ」とて、

生食をば佐々木に賜ぶ。佐々木長つて申しけるは、「今度此の御馬にて、宇治川の眞先渡し候ふべし。若し死にたりと聞し召され候はゞ、人に先をせられてげりと、思し召され候ふべし。未だ生きたりと聞し召され候はゞ、定めて先陣をば、高綱ぞしつらんものをと、思し召され候へ」とて、御前を罷り立つ。參會したる大名小名、「哀れ荒涼の申し様哉」とぞ、人々叫き合はれける。各鎌倉を立つて、足柄を経て行くもあり、箱根に懸る勢もあり。思ひ／＼に上る程に、駿河の國浮島が原にて、梶原源太景季、高き所に打ち上り、暫く扣へて多くの馬どもを見けるに、思ひ／＼の鞆置かせ、色々の鞆かけ、或は乗口に引かせ、或は諸口に牽かせ、幾千萬と云ふ數を知らず、引き通し引き通ししける中にも、景季が賜つたる磨墨に勝る馬こそ無かりけれと、嬉しう思ひて見る處に、爰に生食と覺しき馬こそ一騎出で來たれ。金覆輪の鞍置かせ、小總の鞆懸け、白轡はげ、白沫かませて、舍入あまた付けたりけれども、猶引きもためず、躍らせてこそ出で來たれ。梶原打寄つて、「是は誰が御馬ぞ」「佐々木殿の御馬候」と申す。「佐々木は三郎殿か、四郎殿か」「四郎殿の御馬候」とて引き通す。梶原、「安からぬ事なり。同じ様に召し使はるゝ景季を、佐々木に思し召し替へられける事こそ遺恨の次第なれ。今度都へ上り、木曾殿の御内に四天王と聞ゆる、今井、樋口、楯、根井と組んで死ぬるか。然らずば西國へ向つて、一人當千と聞ゆる平家の侍共と

軍して、死なんとこそ思ひしに、この御氣色では、それも詮なし。詮する所爰にて佐々木を待ち受け、引き組み刺し違へ、好き侍二人死にて、鎌倉殿に損とらせ奉らん」と、つぶやいてこそ待懸けたり。佐々木何心もなう歩ませて出で來たり。梶原、推並べてや組む、向ふ様に當てや落すべきと思ひけるが、先づ詞をぞ懸けける。「如何に佐々木殿は、生食賜らせ給ひて、上らせ給ふな」と云ひければ、佐々木、哀れこの仁も、内々所望申しつると聞きしものと思ひ、「さ候へば、今度この御大事に罷り上り候ふが、定めて宇治勢田の橋をや引きたるらん。乗つて河を渡すべき馬はなし。生食を申さばやとは存じつれども、御邊の申させ給ふだに、御赦されなきと承つて、況して高綱などが申すとも、よも賜はらじと思ひ、後日に如何なる御勘當も有らばあれと存じつつ、曉立たんとての夜、舍人に心を合せて、さしも御秘藏の生食を盗みすまして、上りさうは如何に梶原殿」と云ひければ、梶原、この詞に腹がゐて、「ねつたい、さらば景季も盗むべかりけるものを」とて、咄と笑うてぞ退きける。佐々木四郎の賜はられたりける御馬は、黒栗毛なる馬の、極めて太う逞しきが、馬をも人をも傍を拂つて食ひければ、生食とは付けられたり。八寸の馬とぞ聞えし。梶原が賜つたりける御馬も、極めて太う逞しきが、誠に黒かりければ、磨墨とは付けられたり。何れも劣らぬ名馬なり。

去程に東國より攻め上る大手搦手の軍兵、尾張の國より二手に分つて攻め上る。大手の大將軍には、蒲の御曹司範頼、相伴ふ人々、武田の太郎、加賀見の次郎、一條の次郎、板垣の三郎、稻毛の三郎、榛谷の四郎、熊谷の次郎、猪俣の小平六を先として、都合その勢三萬五千餘騎、近江の國野路篠原にぞ陣を取る。搦手の大將軍には、九郎御曹司義經、同じく伴ふ人々、安田の三郎、大内の太郎、畠山の庄司次郎、梶原源太、佐々木四郎、糟屋の藤太、澁谷の右馬の允、平山の武者所を先として、都合その勢二萬五千餘騎、伊賀の國を経て宇治橋の詰にぞ押寄せたる。宇治も勢田も橋を引き、水の底には亂杭打つて大綱張り、逆木つないで流し懸けたり。比は睦月二十日餘りの事なれば、比良の高根、志賀の山、昔長柄の雪も消え、谷々の氷打解けて、水は折節増りたり。白浪夥しう漲り落ち、瀬枕大きに瀧鳴つて、逆巻く水も早かりけり。夜は既にほのくくと明け行けど、河霧深く立籠めて、馬の毛も、鎧の毛も、さだかならず。大將軍九郎御曹司、河の端に打出で、水の面を見渡いて、人々の心を見んとや思はれけん、「淀一口へや向ふべき、又河内路へや廻るべき、水の落足をや待つべき、如何せん」と宣ふ處に、爰に武藏の國の住人、畠山の庄司次郎重忠、生年二十一に成りけるが、進み出で、「この河の御沙汰は、鎌倉にても能々候ひしぞかし。兼ても知し召されぬ海河の、俄に出て來ても候はゞこそ。近江の湖の末なれば、待つと

もく水旱まじ。橋をば又誰か渡いて参らすべき。去んぬる治承の合戦に、足利の又太郎忠綱が、生年十七歳にて渡しけるも、鬼神にてはよもあらし。重忠先づ瀬踏仕らん」とて、丹の黨を宗として、五百餘騎ひしくと鑣を並ぶる處に、爰に平等院の良、橋の小島が崎より、武者二騎引つかけく出で來たり。一騎は梶原源太景季、一騎は佐々木の四郎高綱也。人目には何とも見えざりけれども、内々先に心を懸けたらん。梶原は佐々木に一段計りぞ進んだる。佐々木「如何に梶原殿、この河は西國一の大河ぞや。腹帯の延びて見えさうぞ、縮め給へ」と云ひければ、梶原さも有るらんとや思ひけん。手綱を馬のゆがみに捨て、左右の鎧を踏み透し、腹帯を解いてぞ縮めたりける。佐々木その間に、そこをつと馳せ抜いて、河へ颯とぞ打ち入れたる。梶原謀られぬとや思ひけん、馳て續いて打入れたり。梶原「いかに佐々木殿、高名せうとて不覺し給ふな。水の底には大綱あるらん、心得給へ」と云ひければ、佐々木さも有るらんとや思ひけん、太刀を抜いて、馬の足に懸りける大綱共を、ふつふつと打ち切りく、宇治川早しと云へども、生食と云ふ世一の馬には乗つたりけり。一文字に颯と渡つて、向の岸にぞ打上げたる。梶原が乗つたりける磨墨は、川中より笠檠形に押流され、遙の下より打上げたり。その後佐々木鎧踏張立ち上り、大音聲を揚げて、「宇多の天皇に九代の後胤、近江の國の住人佐々木三郎秀義が四男、佐々木四郎高



綱、宇治川の先陣ぞや」とぞ名乗つたる。

畠山五百餘騎打入れて渡す。向ひの岸より、山田の次郎が放つ矢に、畠山馬の額を筈深に射させ、はぬれば、弓杖を突いて下り立つたり。岩波甲の手先へ、颯と押し懸けけれども、畠山是を事もせず、水の底を潛つて、向の岸にぞ著きにける。打上らんとする處に、後より物こそ無手と扣へたれ。「誰そ」と問へば、「重親」と答ふ。「大串か」「さん候」。大串の次郎は、畠山が爲には烏帽子子にてぞ候ひける。「餘りに水が早うて、馬をば川中より押し流され候ひぬ。力及ばではまで著き参つて候」と云ひければ、畠山、「いつも和殿原が様なる者は、重忠にこそ助けられんすれ」と云ふ儘に、大串を擱んで岸の上へぞ投げ上げた。投げ上げられてたゞ直り、太刀を抜いて額にあて、大音聲を揚げて、「武藏の國の住人、大串の次郎重親、宇治川の歩立の先陣ぞや」とぞ名乗つたる。敵も御方も是を聞いて、一度に咄とぞ笑ひける。その後畠山乗替に乗つて、喚いてかく。爰に魚陵の直垂に、緋威の鎧著て、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて、乗つたりける武者一騎、眞先に進んだるを、畠山、「爰に驅くるは如何なる者ぞ、名乗れや」と云ひければ、「是は木曾殿の子に、長瀬の判官代重綱」と名乗る。畠山、「今日の軍神祝はん」とて、押し雙べて無手と組んで引落し、我が乗つたりける鞍の前輪に押し付け、些とも動かさず、頸ねち切つて、本

田の次郎が鞍のとつ附にこそ付けさせけれ。是を始めて、宇治橋堅めたりける兵ども、暫し支へて防ぎ戦ふと云へども、東國の大勢皆渡いて攻めければ、力及ばず、木幡山伏見を指してぞ落行きける。勢田をば稻毛の三郎重成が計らひにて、田上の供御の瀬をこそ渡しけれ。

河原合戦

軍破れにければ、九郎御曹司義經、飛脚を以て、鎌倉殿へ合戦の次第を委しう註いて申されけり。鎌倉殿、先づ御使に、「佐々木はいかに」と御尋有りければ、「宇治川の眞先候」と申す。さて日記を披いて見給へば、宇治川の先陣、佐々木四郎高綱、二陣梶原源太景季とぞ書かれたる。宇治勢田破れぬと聞えしかば、木曾は最後の暇申さんとて、院の御所六條殿へ馳せ参る。木曾門前迄参りたりしかども、さして奏すべき旨もなくして、取つて返し、六條高倉なる所に、初めて見そめたりける女房の有りければ、そこに打ち寄つて、最後の名残惜まんとて、とみに出でもやらざりけり。爰に今参りしたりける、越後の中太家光と云ふ者あり。「御敵既に河原迄攻め入つて候ふに、何とて左様に打解けては渡らせ給ひ候ふやらん。只今犬死せさせ給ひ候ひなんす。とう／＼御出で候へ」と申しけれども、猶出でもやらざりければ、「左候はゞ家光は先づ先立ち進らせて、

死出の山にてこそ待ち進らせ候はめ」とて、腹搔き切つてぞ死にける。木曾、「是は我を進むる自害にこそ」とて、馳て打ち給ひけり。爰に上野の國の住人、那波の太郎廣純を先として、その勢百騎ばかりには過ぎざりけり。六條河原に打ち出で、見れば、東國の勢と覺しくて、先づ三十騎ばかりで出で来る。その中より武者二騎先に進んだり。一騎は鹽屋の五郎惟廣、一騎は勅使河原の五三郎有直也。鹽屋が申しけるは、「後陣の勢をや待つべき」又勅使河原が申しけるは、「一陣破れぬれば殘黨全からず。只懸けよや」とて、喚いて駆く。木曾は今日を最後と戦へば、東國の大勢木曾を中に取り籠めて、我れ討取らんとぞ進みける。大將軍九郎御曹司義經、軍をば軍兵共にせさせ、我が身は院の御所の覺束なきに、守護し奉らんとて、混甲五六騎、院の御所六條殿へ馳せ參る。御所には、大膳の大夫成忠、御所の東の築牆の上に登り揚つて、慄なく見渡せば、武士五六騎除甲に戦ひ成つて、射向の袖春風に吹き靡かさせ、白旗颯と差し擧げ、黒煙蹴立て、馳せ參る。成忠、「あなあさまし。木曾が又參り候」と申しければ、院中の公卿殿上人、傍の女房達に至る迄、今度ぞ世の失せはてとて、手を握り立てぬ願もまします。成忠重ねて奏聞しけるは、「今日始めて都へ入る、東國の武士と覺え候。如何様にも皆笠印が替つて候」と、申しも果てぬに、大將軍九郎御曹司義經、門前にて馬より下り、門を敲かせ、大音聲を揚げて、「鎌倉の前の右

兵衛の佐頼朝が弟、九郎義經こそ、宇治の手を攻め破つて、この御所守護の爲に馳せ參つて候へ。開けて入れさせ給へ」と申されたりければ、成忠餘りの嬉しさに、急ぎ築牆の上より躍り下ると、腰を衝き損じたりけれども、痛さは嬉しさに紛れて覺えず、這々御所へ參つて、この由奏聞したりければ、法皇大きに御感あつて、門を開けさせてぞ入れられる。義經その日の装束には、赤地の錦の直垂に、紫下濃の鎧著て、鍬形打つたる甲の緒を締め、金作の太刀を帶き、廿四指いたる截生の矢負ひ、滋藤の弓の鳥打の本を、紙を廣さ一寸ばかりに切つて、左巻に巻きたる。是ぞ今日の大將軍の印とは見えし。法皇中門の連子より觀覽あつて、「ゆゝしげなる者共哉、皆名乗らせよ」と仰せければ、先づ大將軍九郎義經、次に安田の三郎義定、畠山の庄司次郎重忠、梶原源太景季、佐々木四郎高綱、澁谷の右馬の允重資とぞ名乗つたる。義經具して武士は六人、鎧は色替つたりけれども、頼魂事柄、何れも劣らず。成忠仰せ承つて、義經を大床の際へ召して、合戦の次第を委しう御尋あり。義經畏つて申されけるは、「鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝、木曾が狼藉めんとして、範頼義經を先として、都合六萬餘騎を差し上せ候ふが、範頼は勢田より參り候へども、未だ一騎も見え候はず。義經は宇治の手を攻め破つて、この御所守護の爲に馳せ參じて候へ。木曾は河原を上りに落ち候ひつるを、軍兵共を以て追はせ候ひつるが、今は定めて討取り候

ひなんず」と、最事もなげにぞ申されける。法皇大に御感あつて、「又木曾が餘黨など參つて、狼藉もぞ仕る。汝はこの御所能々守護仕れ」と仰せければ、畏り承つて、四方の門を堅めて待つ程に、兵共馳せ集つて、程なく一萬餘騎計りに成りにけり。

木曾は自然の事あらば、法皇取り奉つて、西國へ落ち下り、平家と一つに成らんとて、力者廿人汰へて待つたりけれども、御所には又九郎義經參つて、緊しう守護し奉ると聞いて、今は叶はじとや思ひけん、河原を上りに落行きけるが、六條河原と三條河原の間にて、既に討ち取られんとする事度々に及ぶ。木曾涙を流いて、「かくあるべしとも期したりせば、今井を勢多へは遣らざらまし。幼少竹馬の昔より、死なば一所で死なんとこそ契りしか。今に所々で討たれん事こそ悲しけれ。さりながら今一度今井が行方を聞かんとて、河原を上りに懸かる程に、六條河原と三條河原の間にて、敵襲ひ懸かれれば、取つて返し取つて返し、木曾纒なる小勢にて、雲霞の如くなる敵の大勢を、五六度迄追ひ返し、賀茂河さつと打ち渡り、粟田口松坂にも懸かりけり。去年信濃を出でしには、五萬餘騎と聞えしが、今日四の宮河原を過ぐるには、主従七騎になりにけり。況して中有の旅の空、思ひやられて哀れなり。

木曾の最後

木曾は信濃を出でしより、巴、款冬とて、二人の美女を具せられたり。款冬は勞有つて、都に留りぬ。中にも巴は色白う髪長く、容顏誠に美麗也。究竟の荒馬乗の、惡所落し、弓矢打物取つては、如何なる鬼にも神にも逢ふと云ふ、一人當千人の兵也。されば軍と云ふ時は、杓よき鎧著せ、強弓大太刀持たせて、一方の大將に向けられけるに、度々の高名肩を雙ぶる者なし。されば今度も多くの者落ち失せ討たれける中に、七騎が申までも、巴は討たれざりけり。木曾は長坂を経て、丹波路へとも聞ゆ。龍華越に懸かつて、又北國へとも聞えけり。かゝりしかども、今井が行末の覺束なさに、取つて返して、勢多の方へぞ落行き給ふ。今井の四郎兼平も、八百餘騎にて勢田を堅めたりけるが、五十騎計りに打なされ、旗をば卷かせて持たせつゝ、主の行方の覺束なさに、都の方へ上る程に、大津の打出の濱にて、木曾殿に行きあひ奉る。中一町計りより、互にそれと見知つて、主従駒を早めて寄り合ひたり。木曾殿今井が手を把つて宣ひけるは、「義仲六條河原にて、如何にも成るべかりしかども、汝が行方の覺束なさに、多くの敵に後を見せて、是迄遁れたるは如何に」と宣へば、今井の四郎、御誼誠に忝う候。兼平も勢田にて討死仕るべう候ひ

しかども、御行方の覺束なさに、是迄遁れ參つて候」と申しければ、木曾殿、「さては契は未だ朽ちせざりけり。義仲が勢山林に馳せ散つて、此邊にも扣へたるらんぞ。汝が旗揚げさせよ」と宣へば、巻いて持たせたる今井が旗差し上げたり。是を見付けて、京より落つる勢ともなく、又勢田より參る者ともなく、馳せ集つて、程なく三百騎計りに成り給ひぬ。木曾殿斜ならず悦びて、「この勢にては最後の軍、一軍などかせざるべき。あれにしぐらうて見ゆるは、誰が手やらん」。「甲斐の一條の次郎殿の御手とこそ承つて候へ」。「勢は如何程有らん」。「六千餘騎と聞え候」。「さては五によい敵、同じう死ぬるとも、大勢の中へ懸け入り、よい敵に逢うてこそ、討死をもせめ」とて、眞先にぞ進み給ふ。木曾殿其の日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧著て、いか物作りの太刀を帯き、鍬形打つたる甲の緒をしめ、二十四指いたる石打の矢の、その日の軍に射て、少々残つたるを、頭高に負ひなし、滋藤の弓の眞中取つて、聞ゆる木曾の鬼蘆毛といふ馬に、金覆輪の鞍を置いて乗つたりけるが、鐘踏張り立ち上り、大音聲を揚げて、「日來は聞きけんものを、木曾の冠者、今は見るらん、左馬の頭兼伊豫の守朝日の將軍源の義仲ぞや。甲斐の一條の次郎とこそ聞け。義仲討つて兵衛の佐に見せよや」とて、喚いて懸く。一條の次郎是を聞いて、「只今名乗るは、大將軍ぞや。餘すな者共、洩らすな若黨、討てや」とて、大勢の中に取り籠

めて、我討取らんとぞ進みける。木曾三百餘騎、六千餘騎が中へ懸入り、堅様、横様、蜘蛛手、十文字に懸け破つて、後へつと出でたれば、五十騎計りに成りにけり。そこを破つて行く程に、土肥の次郎實平、二千餘騎で支へたり。そこをも破つて行く程に、あそこにては四五百騎、爰にては二三百騎、百四五十騎、百騎計りが中を、懸け破り／＼行く程に、主従五騎にぞ成りにける。五騎が中迄も、巴は討たれざりけり。木曾殿巴を召して、「已れは女なれば、是より疾う／＼何地へも落行け。義仲は討死をせんずる也。若し人手に懸らずば、自害をせんずれば、義仲が最後の軍に、女を具したりなど云はれん事、口惜しかるべし」と宣へども、猶落ちも行かざりけるが、餘りに強う云はれ奉つて、「哀れ好からう敵の出で來よかし。木曾殿に最後の軍して見せ奉らん」とて、扣へて敵をまつ處に、爰に武藏の國の佳人、御田の八郎師重と云ふ大力の剛の者、三十騎計りで出で來る。巴の中へ破つて入り、先づ御田の八郎に押し雙べ、無手と組んで引き落し、我が乗つたりける鞍の前輪に推しつけて、些とも動かさず、頸ねぢ切つて捨てんげり。その後物具脱ぎ棄て、東國の方へぞ落行きける。手塚の太郎討死す。手塚の別當落ちにけり。木曾殿今井の四郎只主従二騎に成て宣ひけるは、「日來は何とも覺えぬ鎧が、今日は重う成つたるぞや」と宣へば、今井の四郎申しけるは、「御身も未だ贏れさせ給ひ候はず。御馬も弱り候はず。何に依つて

一領の御著背を、俄に重うは思召され候ふべき。そは御方に續く勢が候はねば、臆病でこそ、さは思し召し候ふらめ。兼平一騎をば、餘の武者千騎と思召し候ふべし。爰に射残したる矢七つ八つ候へば、暫く防矢仕り候はん。あれに見え候は、粟津の松原と申し候。君はあの松の中へ入らせ給ひて、靜に御自害候へ」とて、打つて行く程に、又荒手の武者五十騎計りで出で来る。兼平は、「この御敵暫く防ぎ進らせ候ふべし。君はあの松の中へ入らせ給へ」と申しければ、義仲、「六條河原にて、如何にも成るべかりしかども、汝と一所で如何にも成らん爲にこそ、多くの敵に後を見せて、是迄遁れたんなり。所々で討たれんより、一所でこそ討死をもせめ」とて、馬の鼻を雙べて、既に懸けんとし給へば、今井の四郎急ぎ馬より飛んで下り、主の馬の水づきに取り付き、涙をはらくと流いて、「弓矢取は、年來日來如何なる高名候へども、最後に不覺しぬれば、永き取にて候ふ也。御身も羸れさせ給ひ候ひぬ。御馬も弱つて候。云ふ甲斐なき人の郎等に組み落されて、討たれさせ給ひ候ひなば、さしも日本國に鬼神と聞えさせ給ひつる木曾殿をば、何某が郎等の手に懸けて、討ち奉つたりなど申されん事、口惜しかるべし。唯理を枉げて、あの松の中へ入らせ給へ」と申しければ、木曾殿、「さらば」とて、只一騎粟津の松原へぞかけ給ふ。今井の四郎取つて返し、五十騎計りが勢の中へかけ入り、鎧踏張立ち上り、大音聲を揚げて、「遠からん者



は音にも聞け、近らん人は目にも見給へ。木曾殿の乳母子に、今井の四郎兼平とて、生年三十三に罷り成る。さる者有りとは、鎌倉殿迄も知し召されたるらんぞ。兼平討つて兵衛の佐殿の御見参に入れよや」とて、射残したる八筋の矢を、差しつめ引きつめ散々に射る。死生は知らず、矢庭に敵八騎射落し、その後太刀を抜いて、斬つて廻るに、面を合する者ぞなき。只射取れや射取れとて、差しつめ引きつめ散々に射けれども、鍛好ければ裏かゝず、開間を射ねば手も負はず。木曾殿は只一騎、栗津の松原へ懸け給ふ。比は正月廿一日、入相計りの事なるに、薄氷は張つたりけり。深田有りとも知らずして、馬を颯と打ち入れたれば、馬の首も見えざりけり。あふれども、打てともく動かず。かゝりしかども、今井が行方の覺東なさに、振り仰き給ふ所を、相模の國の住人、三浦の石田の次郎爲久追つ懸り、能つ引てひようと放つ。木曾殿内甲を射させ、痛手なれば、甲の眞甲を馬の首に押し當て、俯し給ふ所を、石田が郎等二人落合ひて、既に御頸をば賜りけり。やがて頭をば太刀の鋒に貫き、高く指上げ、大音聲を揚げて、「此の日来日本國に鬼神と聞えさせ給ひつる木曾殿をば、三浦の石田の次郎爲久が討ち奉るぞや」と名乗りければ、今井の四郎は軍しけるが、是を聞いて、「今は誰をかば、んとて、軍をばすべき。是見給へ、東國の殿原、日本一の剛の者の、自害する手本よ」とて、太刀の鋒を口に含み、馬より倒に飛び落ち、

貫かつてぞ失せにける。

樋口の被斬

今井が兄の樋口の次郎兼光は、十郎藏人討たんとて、その勢五百餘騎で、河内の國長野の城へ越えたりけるが、其にては討ち漏しぬ。紀伊の國名草にありと聞いて、馳て續いて寄せたりけるが、都に軍ありと聞いて、取つて返して上る程に、淀の大渡の橋にて今井が下人に行きあうたり。是はされば、何地へとて渡らせ給ひ候ふやらん。都には軍出で来て、君は討たれさせ給ひ候ひぬ。今井殿も御自害候」と云ひければ、樋口の次郎涙をはらくと流いて、「是聞き給へ殿原、君に御志思ひ進らせん人々は、是よりとうとう何地へも落行き、如何ならん乞食頭陀の行をもして、君の御菩提を弔ひ進らせ給へ。兼光は都へ上り討死して、冥途にても君の御見参に入り、今井をも今一度見ばやと思ふ爲也」とて、打つて行く程に、五百餘騎の勢共、あそこ爰に扣へ落行く程に、鳥羽の南の門を過ぐるには、その勢纔に二十餘騎にぞ成りにける。樋口の次郎今日既に都へ入ると聞えしかば、黨も高家も、七條、朱雀、作道、四塚へ馳せ向ふ。樋口が手に、茅野の太郎光廣と云ふ者あり。四塚に幾らもありける勢の中へ懸け入り、鎧踏張立ち揚り、大音

聲を揚げ、「この勢の中に甲斐の一條の次郎殿の、御手の人やまします」と問ひければ、「一條の次郎が手でないは、軍をばせぬか。誰にも合へかし」とて、咄と笑ふ。笑はれて名乗りけるは、「斯申す者は、信濃の國諏訪の上の宮の佳人、茅野の大夫光家が子に、茅野の太郎光廣と云ふ者也。必ず一條の次郎殿の、御手の人を尋ぬるには非ず。弟の七郎それにより。子供二人信濃の國に置いたるが、哀れ我が父は、好うてや死んだらん、悪しうてや死んだらんと歎かんする處に、弟の七郎が前にて討死して、子供に慥に聞かせんと思ふ爲也。敵をば嫌ふまじ」とて、あれに馳せ會ひ、是に馳せ合ひ、武者三騎切つて落し、四人に當る敵に押し雙べ、無手と組んでどうと落ち、刺し違へてぞ死にける。樋口の次郎は兒玉黨に結ばれたれば、兒玉の人共寄合ひて、抑弓矢取の、我も人も廣中へ入ると云ふは、自然の時一先づの息をも續ぎ、暫しの命をも生かうと思ふ爲也。されば樋口が我等に結ばれけんも、さこそありけめ。命計りを助けんとて、樋口が許へ使者を立て、「木曾殿の御内に、今井、樋口、楯、根井と聞えさせ給ひて候へども、木曾殿討たれさせ給ひ候ひぬ。今井殿も御自害候ふ上は、何か苦しう候ふべき。我等が中へ降人に成り給へ。今度の勳功の賞に申し替へて、御命計りをば、助け奉らん」と云ひ送りたりければ、樋口の次郎は聞ゆる兵なりしかども、運や盡きにけん、おめくと兒玉黨の中へ、降人にこそ成

りにけれ。大將軍範頼義經にこの由を申す。院へ伺ひ申されたりければ、院中の公卿殿上人、局の女房、女の童に至る迄、「木曾が法住寺殿へ寄せて、御所に火を懸け焼き亡し、多くの高僧貴僧を失ひたりしには、あそこにも爰にも、今井樋口と云ふ聲のみこそありしか。是等を助けられんは、無下に口惜しかるべし」と、口々に申されたりければ、叶はずして又死罪にぞ定められける。同じき廿二日新攝政殿停められさせ給ひて、本の攝政還著し給ふ。纔六十日の内に替へられさせ給ひぬれば、未だ見果てぬ夢の如し。昔栗田の關白は、悦申の後只七箇日だにありしぞかし。是は六十日と申せども、その間に節會も除目も行はれぬれば、思出なきに非ず。同じき廿四日、木曾の左馬の頭、餘黨五人が頸、都へ入れて大路を渡さる。樋口の次郎は降人たりしが、頻に頸の供せんと申しければ、さらばとて、藍摺の直垂烏帽子にてぞ渡されける。明くる廿五日、樋口の次郎終に斬られにけり。範頼義經様々に申されけれども、今井、樋口、楯、根井とて、木曾が四天王の其の一つなれば、是等を助けられんは、養虎の憂あるべしと、殊に沙汰あつて、斬られけるとぞ聞えし。傳に聞く、虎狼の國衰へて、諸侯蜂の如くに起つし時、浦公先に咸陽宮へ入ると云へども、項羽が後に來らん事を恐れて、妻は美人をも犯さず、金銀珠玉をも掠めず、徒に函谷の關を守つて、漸々に敵を亡して、天下を治する事を得たりき。されば今の木曾の左馬の頭も、

先づ都へ入ると云へども、頼朝の朝臣の命に順はましかば、彼の浦公が謀には劣らざらまし。
去程に平家は去年冬の比より、讃岐の國八島の磯を出で、攝津の國難波瀉押し渡り、西は一の谷を城郭に構へ、東は生田の森を大手の木戸口とぞ定めける。その間福原、兵庫、板宿、須磨に籠る勢、山陽道八箇國、南海道六箇國、都合十四箇國を討ち隨へて、召さるゝ所の軍兵、十萬餘騎とぞ聞えし。一の谷は北は山、南は海、口は狭くて奥廣し。岸高くして屏風を立てたるに異ならず。北の山際より、南の海の遠淺迄、大石を重ね上げ、大木を伐つて逆木にひき、深き所には大舟共を側て、搔楯にかき、城の面の高櫓には、四國鎮西の兵ども、甲冑弓箭を帶して、雲霞の如くに列み居たり。櫓の前には、鞍置馬共、十重廿重に引つ立てたり。常に大鼓を打つて、亂聲す。一張の弓の勢ひは、半月胸の前に懸り、三尺の劍の光は、秋の霜腰の間に横へたり。高き所には赤旗多く打立てたれば、春風に吹かれて、天に翻るは、只火炎の燃え上るに異ならず。

六箇度合戦

去程に平家一の谷へ渡り給ひて後は、四國の者共一向隨ひ奉らず。中にも阿波讃岐の在廳等、皆平家を背いて、源氏に心を通はしけるが、流石昨日今日迄、平家に隨ひ奉つたる身の、今日始

めて源氏へ参りたりとも、よも用ひ給はじ。平家に矢一つ射懸け奉つて、それを表にして参らんとて、門脇の平中納言教盛、越前の三位通盛、能登の守教經、父子三人、備前の國下津井に在すと聞いて、兵船十餘艘でぞ寄せたりける。能登殿大きに怒つて、「昨日今日迄、我等が馬の草剪つたる奴原が、何しか契を變ずるにこそあんなれ。その儀ならば、一人も洩さず討てや」とて、小船共押し浮べて追はれければ、四國の者共、人目計りに矢一つ射て、退かんとこそ思ひしに、能登殿に餘りに手痛う攻められ奉つて、叶はじと思ひけん、遠負にして引き退き、淡路の國福良の泊に著きにけり。その國に源氏二人ありと聞えけり。故六條の判官爲義が末子、賀茂の冠者義嗣、淡路の冠者義久と聞えしを、大將に頼んで、城郭を構へて待つ處に、能登殿押し寄せて散々に攻め給へば、賀茂の冠者討死す。淡路の冠者は痛手負うて虜にこそせられけれ。残り留つて防矢射ける者共、二百三十餘人が頸斬り懸けさせ、討手の交名記いて、福原へこそ進らせられけれ。それより門脇殿は、一の谷へぞ参られける。子息達は伊豫の河野の四郎が召せども参らぬを責めんとて、四國へぞ渡られける。兄越前の三位通盛の卿は、阿波の國花園の城にぞ著き給ふ。弟能登の守教經は、讃岐の八島に著き給ふ由聞えしかば、伊豫の國の住人、河野の四郎通信は、安藝の國の住人、沼田の次郎は、母方の伯父也ければ、一つに成らんとて、安藝の國へ推し渡る。能

登殿この由を聞き給ひて、八島を立つて追はれけるが、その日は備後の國袋島と云ふ所に著きて、次の日沼田の城へぞ寄せられける。沼田の次郎・河津の四郎一つに成つて、城郭を構へて持つ處に、能登殿聽て押し寄せて、散々に攻め給へば、沼田の次郎叶はじとや思ひけん、甲を脱ぎ弓の弦を外いて、降人に參る。河野は猶も順はず。その勢五百餘騎ありけるが、五十騎計りに討成され、城を落ちて行く處に、爰に能登殿の侍に、平八兵衛爲員と云ふ者、二百騎計りが中に取籠められ、主従七騎に討ち成され、助舟に乗らんとて、細道に懸つて汀の方へ落行く處を、平八兵衛が子息、讚岐の七郎義範、究竟の弓の上手なりければ、追つ懸り能つ引いて七騎を五騎射落す。主従二騎にぞ成りにける。河野が身に替へて思ひける郎等に、讚岐の七郎押雙べ無手と組んでどうと落ち、取つて押へて頸を搔かんとする所に、河野の四郎取つて返し、我が郎等の上なる讚岐の七郎が頸搔き切つて深田へ投げ入れ、大音聲を揚げて、「伊豫の國の住人、河野の四郎越智の通信、生年二十一、軍をば斯こそすれ。吾れと思はん人々は、寄つて留めよや」と名乗り捨て、郎等を肩に引つ懸け、其をばなつく逃げ延び、伊豫の國へ押渡る。能登殿河野をば討ち漏されたりけれども、沼田の次郎が降人たるを召し具して、一の谷へぞ參られける。又阿波の國の住人、安摩の六郎忠景、是も平家を背いて、源氏に心を通はしけるが、大船二艘に兵糧米積み、物具入

れ、都を指して上りけるを、能登殿福原にて、この由を聞き給ひて、小舟共押し浮べて追はれければ、西の宮の沖にて返し合せて防ぎ戦ふ。能登殿、「餘すな洩すな」とて、散々に攻め給へば、安摩の六郎叶はじとや思ひけん、和泉の國吹飯の浦に楯籠る。又紀伊の國の住人、園邊の兵衛忠康、是も平家に快からざりけるが、安摩の六郎が能登殿に手痛う攻められ奉つて、和泉の國吹飯の浦にありと聞いて、その勢百騎計りで、和泉の國へ打ち越えて、安摩の六郎園邊の兵衛一つに成つて、城郭を構へて待つ所に、能登殿聽て推寄せて、散々に攻め給へば、安摩の六郎園邊の兵衛、叶はじとや思ひけん、身からは逃げて京へ上る。残り留つて防矢射ける兵共、百三十餘人が頸切つて、福原へこそ參られけれ。又豊後の國の住人、臼杵の次郎惟隆、緒方の三郎惟義、伊豫の國の住人、河野の四郎通信一つに成つて、都合その勢二千餘人、小船共に取り乗つて、備前の國へ押し渡り、今木の城に楯籠る。能登殿福原にて、この由を聞き給ひて、安からぬ事也とて、その勢三千餘騎で、備前の國に馳せ下り、今木の城を攻め給ふ。能登殿、「奴原は強い御敵で候。重ねて勢を給はるべき由」申されたりければ、福原より數萬騎の軍兵を、指し向けられる由聞えしかば、城の内の兵共、手の際戦ひ、分捕高名し窮めて、敵は多勢也、味方は小勢也ければ、取り籠められては叶ふまじ。爰をば落ちて、暫しの息を續げやとて、臼杵の次郎惟隆、緒方の三

郎惟義は、豊後の國へ押し渡り、河野は伊豫へぞ渡りける。能登殿今は攻むべき敵なしとて、福原へこそ参られけれ。大臣殿以下の月卿雲客、寄り合ひ給ひて、能登殿の毎度の高名をぞ感じ合はれける。

三 草 勢 汰

同じき正月廿九日、範頼義經院参して、平家追討の爲に、西國へ發向すべき由を奏聞す。本朝には神より傳はれる御寶三つあり、神璽、寶劍、内侍所是也。事故なう都へ返し入れ奉るべき由仰せ下さる。兩人庭上に畏り承つて罷り出づ。二月四日の日、福原には故入道相國の忌日とて、佛事形の如く遂げ行はる。朝夕の軍立に、過ぎ行く月日は知らぬども、去年は今年に廻り來て、憂かりし春にも成りにけり。世の世にて有らましかば、如何なる起立塔婆の企、供佛施僧の營も、有るべかりしかども、只男女の君達たち指し湊ひて、歎き悲み合はれけり。福原には、この次に除目行はれて、僧も俗も皆司なされけり。中にも門脇の平中納言教盛の卿をば、正二位大納言に上り給ふべき由、大臣殿より宣ひ遣はされたりければ、教盛の卿、

今日迄も有れば有るかの我が身かは、夢の中にも夢を見るかな

と御返事申させ給ひて、終に大納言には成り給はず。大外記中原の師直が子、周防の介師純、大外記になる。兵部の少輔正明、五位の藏人になされて、藏人の少輔とぞ召されける。昔將門東八箇國を打ち隨へて、下總の國相馬の郡に都を立て、我が身を平親王と稱して、百宮を成したりしには、曆の博士ぞ無かりける。是はそれには似るべからず。主上舊都をこそ出でさせ給ふと云へども、三種の神器を帶して、萬乗の位に備り給へば、敍位除目行はれんも、僻事には非ず。平家既に福原迄、攻め上つたる由聞えしかば、故郷に残り留り給ふ人々、皆勇み悦び合はれけり。中にも二位の僧都專親は、梶井の宮の年來の御同宿にておはしければ、風の便にも申されけり。宮よりも又御文有り。「旅の空の粧ひ、御心苦しけれども、都も未だ靜まらず」など、細々とあそばいて、奥に一首の歌ぞありける。

人知れず其方を忍ぶ心をば、傾く月にたぐへてぞやる

僧都是を顔に押し當て、悲の涙塞きあへず。去程に小松の三位の中將維盛の卿は、年隔り日重るに隨つて、故郷に留め置き給へる北の方少き人々の事をのみ歎き悲み給ひけり。商人の便に、文などの通ふにも、北の方の都の御栖居、心苦しう聞き給ひて、さらば是へ迎へ進らせて、一所でいかにも成らばやとは思はれけれども、我が身こそあらめ、御爲痛はしくてなど、思し召し沈

んで、明し暮し給ふにぞ、せめての御志の深さの程は顯はれにける。

二月四日の日、源氏福原を攻むべかりしかども、故入道相國の忌日と聞いて、佛事遂げさせんが爲に、その日は寄せず。五日は西塞り、六日は道虚日、七日の日の卯の刻に、一の谷の東西の木戸口にて、源平矢合とぞ定めける。されども四日は吉日なればとて、大手搦手の軍兵、二手に分けて攻め下る。大手の大將軍には、蒲の御曹司範頼、相伴ふ人々、武田の太郎信義、加賀美の次郎遠光、同じき小次郎長清、山名の次郎教義、同じき三郎義行、侍大將には、梶原平三景時、嫡子の源太景季、次男平次景高、同じき三郎景家、稻毛の三郎重成、榛谷の四郎重朝、同じき五郎行重、小山の小四郎朝政、中沼の五郎宗政、結城の七郎朝光、左貫の四郎大夫廣綱、小野寺の禪師太郎道綱、曾我の太郎資信、中村の太郎時經、江戸の四郎重春、玉井の四郎資景、大河津の太郎廣行、庄の三郎忠家、同じき四郎高家、勝大の八郎行平、久下の次郎重光、河原の太郎高直、同じき次郎盛直、藤田の三郎大夫行泰を先として、都合その勢五萬餘騎、二月四日の日の辰の一點に、都を立つて、その日の申酉の刻には、攝津の國毘陽野に陣をぞ取つたりける。搦手の大將軍には、九郎御曹司義經、同じう伴ふ人々、安田の三郎義貞、大内の太郎惟義、村上の判官代康國、田代の冠者信綱、侍大將には土肥の次郎實平、子息の彌太郎遠平、三浦の介義澄、子息の平六義

村、畠山の庄司次郎重忠、同じき長野の三郎重清、佐原の十部義連、和田の小太郎義盛、同じき次郎義茂、三郎宗實、佐々木四郎高綱、同じき五郎義清、熊谷の次郎直實、子息の小次郎直家、平山の武者所季重、天野の次郎直經、小河の次郎資能、原の三郎清益、多々羅の五郎義春、その子の太郎光義、渡柳の彌五郎清忠、別府の小太郎清重、金子の十郎家忠、同じき與一親範、源八廣綱、片岡太郎經春、伊豫の三郎義盛、奥州の佐藤三郎嗣信、同じき四郎忠信、江田の源三、熊井太郎、武藏坊辨慶、是等を先として、都合その勢一萬餘騎、同じ日の同じ時に、都を立つて丹波路に懸かり、二日路を一日打つて、丹波路と播磨の境なる、三草の山の東の山口、小野原に陣をぞ取つたりける。

三草合戦

平家の方の大將軍には、小松の新三位の中將資盛、同じき少將有盛、丹後の侍從忠房、備中の守師盛、侍大將には、伊賀の平内兵衛清家、海老の次郎盛方を先として、その勢三千餘騎で、三草の山の西の山口に押し寄せて陣を取る。その夜の戌の刻計に、大將軍九郎御曹司義經、侍大將土肥の次郎實平を召して、平家は是より三里隔てて、三草の山の西の山口に、大勢で扣へたり。

「夜討にやすべき、又明日の軍か」と宣へば、田代の冠者進み出で、「平家の勢は三千餘騎、御方の御勢は一萬餘騎、遙の利に候。明日の軍と延べられ候ひなば、平家に勢附き候ひなんす。夜討好かんぬと覚え候」と申されければ、土肥の次郎、「いしうも申させ給ふ田代殿哉、誰も斯こそ申し度う候ひつれ。夜討よかんぬと覚え候」と申しければ、兵共、暗さは闇し、如何せんと、口々に申しければ、御曹司、「例の大續松は如何に」と宣へば、土肥の次郎、「去る事候」とて、小野原の在家に火をぞ懸けたりける。是を初めて、野にも山にも草にも木にも火を懸けたれば、晝には些とも劣らずして、三里の山をぞ越え行きける。この田代の冠者と申すは、父は伊豆の國の前の國司、中納言爲綱の末葉也。母は狩野の介茂光が娘を思うて設けたりしを、母方の祖父に預けて、弓矢取には仕立たんなり。俗姓を尋ねれば、後三條の院の第三の皇子、輔仁の親王に五代の孫也。俗姓も能き上、弓矢を取つても好かりけり。平家の方には、その夜、夜討にせんするをば、夢にも知らず、「軍は定めて明日の軍にてぞあらんすらん。軍にも睡たいは大事の物ぞ、能く寝て軍せよ者共」とて、先陣は自ら用心しけれども、後陣の兵共は、或は甲を枕にし、或は鎧の袖籠などを枕として、前後も知らずぞ臥したりける。その夜の夜半計り、源氏一萬餘騎、三草の山の西の山口に押し寄せて、鬨を咄とぞ作りける。平家の方には、餘りに周章て噪いで、弓取る者は矢を

知らず、矢を取る者は弓を知らず、あわてふためきけるが、馬に當てられじとや思ひけん、皆中を開けてぞ通しける。源氏は落ち行く平家を、あそこに追つ懸け、爰に追つつめ、散々に攻めければ、矢場に五百餘人討たれぬ。手負ふ者共多かりけり。大將軍新三位の中將資盛、同じき少將有盛、丹後の侍從忠房、三草の手を破られて、面目なうや思はれけん、播磨の高砂より舟に乗つて、讃岐の八島へ渡り給ひぬ。備中の守師盛計りこそ、何としてかは漏れさせ給ひたりけん、平内兵衛海老の次郎を召し具して、一の谷へぞ參られける。

老馬

大臣殿、安藝の右馬の助能行を使者にて、人々の許へ宣ひ遣されけるは、「九郎義經こそ、三草の手を攻め破つて、既に亂れ入る由聞え候。山の手が大事で候へば、各向はれ候ひなんや」と宣ひ遣はされたりければ、皆辭し申されけり。能登殿の許へも、「度々の事では候へども、今度も又御邊向はれ候ひなんや」と、宣ひ遣されたりければ、能登殿の返事に、「軍は左様に獵漁などの様に、足立の好からう方へは向はう、悪しからん方へは向はじなど候はんには、軍に勝つ事はよも候はじ。幾度でも候へ、強からん方へは教經承つて、罷り向ひ候ふべし。一方打ち破つて進ら

せ候はん。御心安う思し召され候ふべし」と申されたりければ、大臣殿斜ならずに悦び給ひて、越中の前司盛俊を先として、一萬餘騎能登殿にぞ附けられける。兄越前の三位通盛の卿を相具して、山の手へぞ向はれける。この山の手と申すは、一の谷の後鴨越の麓也。通盛の卿、能登殿の假屋へ、北の方迎ひ寄せ給ひて、最後の名残惜まれけり。能登殿大きに怒つて、「この手は大事の方とて、教經向けられ候ふが、誠に強う候ふ也。只今も上の山より、敵落す程ならば、取る物も取りあへ候ふまじ。縦ひ弓をば持つたりとも、矢を番すば悪しかるべし。縦ひ矢をば番たりとも、引かすば猶も悪しかるべし。況して左様に打ち解けて渡らせ給ひては、何の用に合はせ給ふべき」と諫められて、通盛の卿實にもやと思はれけん、急ぎ物具して、人をば返し給ひけり。五日の日の暮方に、源氏昆陽野を立つて、漸う生田の森へ攻め近づく。雀の松原、御影の松、昆陽野の方を見渡せば、源氏手手に陣を取つて、遠火を焼く。更け行くまゝに詠むれば、山の端出づる月の如し。平家も遠火焼けやとて、生田の森にも形の如くぞ焼いたりける。明け行く儘に見渡せば、晴れたる空の星の如し。是や昔河邊の螢と詠じ給ひけんも、今こそ思ひ知られけれ。斯様に源氏は、あそこに陣取つては馬休め、爰に陣取つては馬飼ひなどしける程に急がす。平家の方には今や寄す、今や寄すると相待つて、安い心もせざりけり。

同じき六日の日の曙に、大將軍九郎御曹司義經、一萬餘騎を二手に分けて、土肥の次郎實平に、七千餘騎を差し副へて、一の谷の西の木戸口へ指し遣す。我が身は三千餘騎で、一の谷の後鴨越を落さんとて、丹波路より搦手へこそ向はれけれ。兵共、「是は聞ゆる悪所にてあるなり。同じう死ぬるとも、敵に逢うてこそ死にたけれ。悪所に落ちては死にたからず。哀れこの山の案内者やある」と口々に申しければ、爰に武藏の國の住人、平山の武者所進み出でて、「季重こそこの山の案内能く存知仕て候へ」と申しければ、御曹司、「和殿は東國育ちの者の、今日始めて見る西國の山の案内者、大きに誠しからず」と宣へば、季重重ねて申しけるは、「こは御説とも覺え候はぬ物哉。吉野泊瀬の花をば、見ねども歌人が知り、敵の籠つたる城の後の案内をば、剛の武者が知り候」とぞ申しける。是又傍若無人にぞ聞えし。又武藏の國の住人、別府の小太郎清重とて、生年十八歳に成りけるが、進み出で、申しけるは、「父にて候ひし義重法師が教へ候ひしは、喩へば山越の狩をせよ、又は敵にも襲はれよ、深山に迷ひたらんする時は、老馬に手綱結んで打ち懸け、先に追つ立て行け。必ず道へ出でうするぞとこそ教へ候ひしか」と申しければ、御曹司、「優しうも申したる者哉。雪は野原を埋めども、老いたる馬ぞ道は知ると云ふ様有り」とて、白葦毛なる老馬に、鏡鞍置き、白轡番げ、手綱結んで打ち懸け、先に追つ立て、未だ知らぬ深山へこそ入り

給へ。比は二月初の事なれば、峰の雪村消えて、花かと思ゆる所も有り、谷の鶯音信れて、霞に迷ふ所も有り。登れば白雪皓々として聳え、下れば青山峨々として岸高し。松の雪だに消えやらで、苔の細道幽なり。嵐にたぐふ折々は、梅花とも又疑はれ、東西に鞭を揚げ、駒を早めて行く程に、山路に日暮れぬれば、皆下り居て陣を取る。爰に武藏坊辨慶、或る老翁一人具して参りたり。御曹司、「あれは如何に」と宣へば、「是はこの山の獵師で候」と申しければ、「さては案内能く知つたるらん」。「争でか存知仕らでは候ふべき」。御曹司、「さぞあるらん。是より平家の城郭一の谷へ落さうと思ふは如何に」。「努々叶ひ候ふまじ。凡そ三十丈の谷、十五丈の岩崎などをば、容易う人の通ふべき候はず。その上城の内には、落穴をも掘り、菱をも植ゑて待ち進らせ候ふらん。況して御馬などは思ひも寄り候はず」と申しければ、御曹司、「さて左様の所は、鹿は通ふか」。「鹿は通ひ候。世間だに暖に成り候へば、草の深きに臥さんとて、播磨の鹿は丹波へ越え、世間だに寒う成り候へば、雪のあさに食まんとて、丹波の鹿は播磨の印南美野へ越え候」とぞ申しける。御曹司、「さては馬場ござんなれ。鹿の通はんする所を、馬の通はざるべき様やある。さらば聽て汝案内者せよ」と宣へば、「この身は年老いて、如何にも叶ひ候ふまじ」と申す。「さて汝に子は無いか」。「候」とて、熊王とて生年十八歳に成りける小冠者を奉る。御曹司聽て鬚取り

上げさせ給ひて、父をば鶯尾の庄司武久と云ふ間、是をば鶯尾の三郎義久と名乗らせて、一の谷の先打せさせ、案内者にこそ具せられけれ。平家亡び、源氏の代に成つて後、鎌倉殿と申違うて、奥州へ下り討たれ給ひし時、鶯尾の三郎義久と名乗つて、一所で死にける兵也。

一一一の懸

六日の夜半計り迄は、熊谷平山搦手にぞ候ひける。熊谷子息の小次郎を呼うで云ひけるは、「この手は悪所であんなれば、誰先と云ふ事もあるまじきぞ。いざうれ土肥が承つて向うたる、西の手へ寄せて、一の谷の眞先懸けう」と云ひければ、小次郎、「この儀尤も然るべう候。誰も斯こそ申し度う候ひつれ。さればとう寄せさせ給へ」と申す。熊谷、「誠や平山も、この手にあるぞかし。打込の軍好まぬ者なれば、平山が様見て参れ」とて、下人を見せに遣す。案の如く平山は、熊谷より先に出で立つて、「人をば知るべからず、季重に於いては、一引も引くまじい者を、引くまじい者を」と、獨言をぞし居たる。下人が馬を飼ふとて、「憎い馬の長食哉」とて、鞭ちければ、平山、「さうなせそ。その馬の名残も、今夜計りぞ」とて打立ちけり。下人走り歸つて、主にこの由告げければ、「さればこそ」とて、是も聽て打立ちけり。熊谷がその夜の装束には、褐の直垂に、

赤革威の鎧著て、紅の母衣を懸け、權太栗毛と云ふ、聞ゆる名馬にぞ乗つたりける。子息の小次郎直家は、澤潟を一入摺つたる直垂に、節繩目の鎧著て、西樓と云ふ白月毛なる馬にぞ乗つたりける。旗指は黄塵の直垂に、小櫻を黄にかへいたる鎧著て、黄河原毛なる馬にぞ乗つたりける。主従三騎打ちつれ、落さんずる谷をば弓手になし、馬手へ歩ませ行く程に、年來人も通はぬ田井の畑と云ふ古道を経て、一の谷の波打際へぞ打ち出でける。一の谷近う鹽屋と云ふ所あり。未だ夜深かりければ、土肥の次郎實平、七千餘騎で叩へたり。熊谷夜に紛れて、波打際よりそこをばつと馳せ通り、一の谷の西の木戸口にぞ押し寄せたる。その時も未だ夜深かりければ、城の内には静まり返つて音もせず。熊谷子息の小次郎に云ひけるは、「この手は悪所であんなれば、我も我もと先に心を懸けたる者共多かるらん。既に寄せたれども、夜の明くるを相待つて、この邊にも叩へたるらんぞ。心狭う直實一人と思ふべからず。いざ名乗らん」とて、搔楯の際に歩ませ寄り、鎧踏張り立ち上り、大音聲を揚げて、「武藏の國の佳人、熊谷の次郎直實、子息の小次郎直家、一の谷の先陣ぞや」とぞ名乗つたる。城の内には是を聞いて、「よし／＼音なせそ。敵の馬の足疲らかせよ。矢種を射盡させよ」とて、應答ふ者こそ無かりけれ。良有つて後より武者こそ二騎續いたれ。「誰そ」と問へば、「季重」と答ふ。「問ふは誰そ」。「直實ぞかし」。「如何に熊谷殿

は、何よりぞ」。「宵より」とこそ答へけれ。「季重も臆て續いて寄すべかりつるを、成田五郎に謀られて、今迄は遅々したりつる也。成田が死なば一所で死なんと契りし間、打ち連れて寄せつれば、痛う平山殿先懸早りなし給ひそ。軍の先をかくと云ふは、御方の勢を後に置いて、先をかけたればこそ、高名不覺をも人に知らるれ。あの大勢の中へ只一騎かけ入つて討たれたらんは、何の詮にか合ふべきと云ふ間、實にもと思ひ、小坂のありつるを打ち登せ、下り様に馬の首を引き立て、御方の勢を待つ處に、成田も續いて出で来り、打ち並べて軍の様をも云ひ合せんするかと思ひたれば、さはなくして、季重が方をば、すげなげに見成しつゝ、傍をつと馳せ通る間、哀れこの者季重謀つて、先懸くるよと思ひ、五六段計り進んだるを、あれが馬は我が馬より弱げなるものを目をかけ、一鞭打つて追つ付き、如何に成田殿は、正なうも季重程の者を、謀り給ふ物哉と云ひかけ、打ち捨てゝ寄せつれば、今は遙に下りぬらん。よも後影をば見たらじ」とこそ語りけれ。

去程に篠目漸う明け行けば、熊谷平山、彼是五騎でぞ叩へたる。熊谷は先に名乗つたりけれど、平山が聞く前にて、又名乗らんとや思ひけん、搔楯の際へ歩ませ寄り、鎧踏張り立ち上り、大音聲を揚げて、「抑以前名乗つたる、武藏の國の佳人、熊谷の次郎直實、子息の小次郎直家、一の

谷の先陣ぞや」とぞ名乗つたる。城の内には是を聞いて、「いざ終夜名乗る、熊谷父子を提げて來ん」とて、進む平家の侍誰々ぞ。越中の次郎兵衛盛續、上總の五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、後藤内定經を先として、宗徒の兵廿餘騎、木戸を開いて懸け出でたり。爰に平山は滋目結の直垂に、緋威の鎧著て、二引兩の母衣をかけ、目槽毛と云ふ聞ゆる名馬にぞ乗つたりける。旗指は黒革威の鎧に、甲猪頸に著なしつゝ、宿月毛なる馬にぞ乗つたりける。保元平治二箇度の軍に、先懸けて高名したる、武藏の國の佳人、平山の武者所季重と名乗つて、喚いてかく。熊谷蒐くれば平山續き、平山蒐くれば熊谷續き、互に我れ劣らじと、入れ替へく名乗り替へく、揉みに揉うで、火出づる程にぞ攻めたりける。平家の侍共、熊谷平山に、餘りに手痛う攻められて、叶はじとや思ひけん、城の内へ颯と引いて、敵を外様に成してぞ防ぎける。熊谷は馬の太腹射させ、はぬれば、弓杖突いて下り立つたり。子息の小次郎直家も、生年十六歳と名乗つて、眞先蒐けて戦ひけるが、弓手の肘を射させ、是も馬より下り、父と雙んでぞ立つたりける。熊谷、「如何に小次郎は手負うたるか。」「さん候。」「鎧築を常にせよ。裏搔かすな。鎧を傾けよ。内甲射さすな」とこそ教へけれ。熊谷は鎧に立つたる矢共撥り捨て、城の内を睨へ、大音聲を揚げて、「去年の冬鎌倉を立ちしより以來、命をば兵衛の佐殿に奉り、骸を一の谷の汀に曝さんと、思ひ切つたる直實

ぞかし。去んぬる室山水島二箇度の軍に打ち勝つて、高名したりと名乗るなる、越中の次郎兵衛、上總の五郎兵衛、悪七兵衛はないか。能登殿はおはせぬか。高名不覺も敵に依つてこそすれ。人毎にはえせじものを。只熊谷父子に落ち合へや、組めや組め」とぞ匂つたる。城の内には是を聞いて、越中の次郎兵衛盛續、好む装束なれば、小村濃の直垂に、赤威の鎧著て、鉞形打つたる甲の緒を締め、金作の太刀を帯き、廿四差いたる截生の矢負ひ、滋藤の弓脇に挟み、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて乗つたりけるが、熊谷父子を目に懸けて、歩ませ寄る。熊谷父子も中を破られじと、交も透さず立ち並び、太刀を抜いて額に當て、後へは一引も引かず、彌前へぞ進んだる。越中の次郎兵衛是を見て、叶はじとや思ひけん、取つて返す。熊谷、「あれは如何に、越中の次郎兵衛とこそ見れ。敵にはどこを嫌はうぞ、押し雙べて組めや組め」と云ひけれども、次郎兵衛、「さもさうす」とて引き返す。上總の悪七兵衛是を見て、「きたない殿原の振舞哉。しや組まんする物を、落ち合はぬ事はよもあらじ」とて、既に蒐け出で組まんとしければ、次郎兵衛、悪七兵衛が鎧の袖を叩へて、「君の御大事はに限るべからず。有るべうもなし」と制せられて、力及ばで組まざりけり。その後熊谷は乗替に乗つて喚いてかく。平山も熊谷父子が戦ふ間に、馬の息休め、是も同じう續いたり。平家の方には是を見て、只射取れや射取れとて、差しつ

め引きつめ散々に射けれども、敵は小勢なり、御方は大勢也ければ、勢に紛れて矢にも當らず。只押し雙べて組めや組めと、下知しけれども、平家の方の馬は、飼ふは稀なり、乗りしげし。舟に久しう立てたりければ、皆彫りきつたる様なりけり。熊谷平山が乗つたる馬は、飼ひに飼うたる大の馬共なり。一當當てば皆蹴倒されぬべき間、流石押し雙べて組む武者一騎も無かりけり。爰に平山は、身に替へて思ひける旗指を討たせて、安からずや思ひけん、城の中へ蒐け入り、聽てその敵が首取つてぞ出でたりける。熊谷父子も、分捕あまたしてげり。熊谷は先に寄せたれども、木戸を開かねば蒐け入らず。平山は後に寄せたれども、木戸を開けたれば懸け入りぬ。さてこそ熊谷平山が、一二の懸けをば争ひけれ。

二度の懸

去程に成田五郎も出で来る。土肥の次郎實平七千餘騎、色々の旗指し上げ、喚き叫んで攻め戦ふ。大手生田の森をば、源氏五萬餘騎で堅めたりけるが、その勢の中に、武藏の國の住人、河原太郎河原次郎とて兄弟あり。河原太郎、弟の次郎を呼うで云ひけるは、「大名は我と手を下さねども、家人の高名を以て名譽す。我等は自ら手を下さでは叶ひ難し。敵を前に置きながら、矢一つ

をだに射すして待ち居たれば、餘りに心元なきに、高直は城の中へ紛れ入つて、一矢射んと思ふ也。されば千萬が一つも、生きて歸らん事有りがたし。汝は残り留つて、後の證人に立て」と云ひければ、弟の次郎涙をはら／＼と流いて、「只兄弟二人有る者が、兄を討たせて、弟があとに残り留つたればとて、幾程の榮花をか保つべき。所々で討たれんより、一所でこそ討死をもせめ」とて、下人共呼び寄せ、妻子の許へ、最後の有様云ひ遣し、馬には乗らで、芥下をはき、弓杖を突いて、生田の森の逆木を上り越えて、城の中へぞ入つたりける。星明に鎧の毛さだかならず。河原太郎大音聲を揚げて、「武藏の國の住人、河原太郎私の高直、同じき次郎盛直、生田の森の先陣ぞや」とぞ名乗つたる。城の内には是を聞いて、「哀れ東國の武士程怖しかりける者はなし。この大勢の中へ、只兄弟二人懸け入つたらば、何程の事をかし出すべき、唯置いて愛せよや」とて、討たんと云ふ者こそ無かりけれ。河原兄弟究竟の弓の上手なりければ、差しつめ引きつめ散に射る。城の中には是を見て、「今はこの者愛し悪し。討てや」と云ふ程こそ有りけめ、西國に聞えたる強弓精兵、備中の國の住人、眞名邊の四郎、眞名邊の五郎とて兄弟有り。兄の四郎をば一の谷に置かれたり。弟の五郎は生田の森にありけるが、是を見て能つ引き暫し保つて兵と射る。河原太郎が鎧の胸板を、後へつと射抜かれて、弓杖に縋り疼む所を、弟の次郎走り寄り、兄を肩

に引つ懸けて、生田の森の逆木登り越えんとする處を、眞名邊が二の矢に、弟の次郎が鎧の草摺のはづれを射させて、同じ枕に臥しにけり。眞名邊が下人落ち合せて、河原兄弟が頸を取る。大將軍新中納言知盛の卿の御見参に入れたりければ、「哀れ剛の者や、是等をこそ一人當千の、好き兵共とも云ふべけれ。可惜者共が命を助けて見で」とぞ宣ひける。その後河原が下人走り散つて、「河原殿兄弟こそ、只今城の中へ眞先懸けて、討たれさせ給ひぬるは」と、呼はつたりければ、梶原平三是を聞いて、「是は私の黨の殿原の不覺でこそ、河原兄弟をば討たせたれ。時能く成りぬるぞ、寄せよや」とて、梶原五百餘騎、生田の森の逆木をとり除けさせて、城の内へ喚いてかく。次男平次餘りに先を蒐けうと進む間、父平三使者を立て、「後陣の勢の續かさらん、先懸けたらん者には、勸賞有るまじき由、大將軍よりの仰ぞ」と云ひ送つたりければ、平次暫く扣へて、

武士の取り傳へたる梓弓、引いては人のかへすものは

と申させ給へやとて、喚いてかく。梶原是を見て、「平次討たすな者共、景高討たすな續けや」とて、父の平三、兄の源太、同じき三郎續いたり。梶原、五百餘騎の大勢の中へ蒐け入り、豎様横様、蜘蛛手、十文字に懸け破つて、颯と引いて出でたれば、嫡子の源太は見えざりけり。梶原、郎等共に、「源太は如何に」と問ひければ、「餘りに深入して討たれさせ給ひて候ふやらん。遙に見

えさせ給ひ候はず」と申しければ、梶原涙をはらくと流いて、「軍の先を懸けうと思ふも、子共がため、源太討たせて、景時命生きても、何にかはせんなれば、返せや」とて又取つて返す。その後梶原鎧踏張り立ち上り、大音聲を揚げて、「昔八幡殿の後三年の御戦に、出羽の國千福金澤の城を攻め給ひし時、生年十六歳と名乗つて、眞先懸け、弓手の眼を甲の鉢付の板に射付けられながら、其の矢を抜かで、當の矢を射返し、敵射落し、勸賞蒙り、名を後代に上げたりし、鎌倉の權五郎景政に、五代の末葉、梶原平三景時とて、東國に聞えたる、一人當千の兵ぞや。我れと思はん人々は、寄り合へや見参せん」とて、喚いてかく。城の内には是を聞いて、「只今名乗るは東國に聞えたる兵ぞや。餘すな、漏すな、討てや」とて、梶原を中に取り籠めて、我れ討取らんとぞ進みける。梶原先づ我が身の上をば知らずして、源太は何くにあるやらんと、蒐け破り蒐け廻り尋ぬる程に、案の如く、源太は馬をも射させ歩立になり、甲をも打ち落され、大童に戦ひなつて、二丈計り有りける岸を後に當て、郎等二人左右に立て、打物抜いて敵五人が中に取り籠められて、面も振らず命も惜まず、爰を最後と攻め戦ふ。梶原是を見て、源太は未だ討たれざりけりと嬉しう思ひ、急ぎ馬より飛んで下り、「如何に源太、景時爰にあり、同じう死ぬるとも、敵に後を見すな」とて、父子して五人の敵を三人討ち捕り、二人に手負はせて、「弓矢取は懸くるも引く

も、折にこそよれ、いざうれ源太」とて、かい具してぞ出でたりける。梶原が二度の懸とは是也。

坂落

是を始めて、三浦、鎌倉、秩父、足利黨には、猪俣、兒玉、野井與、横山、西黨、綴喜黨、總じて私の黨の兵共、源平互に亂れあひ、喚き叫ぶ聲は山を響し、馳せ違ふる馬の音は雷の如く、射違ふる矢は雨の降るに異ならず。或は薄手負うて戦ふ者もあり、或は引つ組み刺し違へて死ぬるもあり。或は取つて押へて首を搔くもあり、搔かるゝもあり、何れ隙有りとも見えざりけり。かゝりしかども、源氏大手計りでは、如何にも叶ふべしとも見えざりしに、七日の日の曙に、大將軍九郎御曹司義經、その勢三千餘騎、鴨越に打ち上つて、人馬の息休めておはしけるが、その勢にや驚きたりけん、牝鹿二つ牝鹿一つ、平家の城郭一の谷へぞ落ちたりける。平家の方の兵共是を見て、縦ひ里近からん鹿だにも、我等に恐れて山深うこそ入るべきに、只今の鹿の落様こそ惟しけれ。如何様にも、是は上の山より敵落すにこそとて、大きに噪ぐ處に、爰に伊豫の國の住人、武智の武者所清教進み出で、「縦ひ何者にてもあらばあれ、敵の方より出で來たらんする者を、通すべき様なし」とて、牝鹿二つ射留めて、牝鹿をば射いでぞ通しける。越中の前司是を

見て、「詮ない殿原の鹿の射様哉。只今の矢一筋では、敵十人をば防がんする物を、罪作りに矢だうなに」とぞ制しける。去程に大將軍九郎御曹司義經、平家の城郭遙に見下しておはしけるが、馬共落いて見んとて、少々落されけり。或は中にて轉んで落ち、或は足打ち折つて死ぬるもあり。されどもその中に、鞍置馬三匹、相違なく落ち着いて、越中の前司が屋形の前に、身振してこそ立つたりけれ。御曹司、「馬は主々が心得て落さんには、痛うは損すまじかりけるぞ。たゞ落せ、義經を手本にせよ」とて、先づ三十騎計り、眞先懸けて落されければ、三千餘騎の兵共、皆續いて落す。其しも小石交りの砂なりければ、流れ落しに二町計り颯と落ちて、壇なる所に扣へたり。其れより下を見下せば、大磐石の苔むしたるが、釣瓶下に、十四五丈ぞ下つたる。其れより先へは進む可き共見えす、又後へ取つて返す可き様も無かりしかば、兵共爰ぞ最後と申して、あきれ扣へたる所に、三浦の佐原の十郎義連、進み出で申しけるは、「我等が方では、鳥一つ立ちてだにも、朝夕斯様の所をば馳せありけ、是は三浦の方の馬場ぞ」とて、眞先懸けて落しければ、大勢皆續いて落す。後陣に落す者の鎧の鼻は、先陣の鎧甲に障る程なり。餘りのいぶせさに、目を塞いで落しける。えい／＼聲を忍びにして、馬に力を付けて落す。大方人の所爲とは見えす、只鬼神の所爲とぞ見えし。落しも果てぬに、関を咄つとぞ作りける。三千餘騎が聲なれども、山彦



答へて十萬餘騎とぞ聞えける。村上の判官代康國が手より火を出だいて、平家の屋形假屋を、片時の烟と焼き拂ふ。黒烟既に押し懸けければ、平家の兵共、若しや助かると、前なる海へぞ多く走り入りける。渚には助舟共いくらも有りけれども、船一艘には鎧うたる者共が、四五百人千人計り込み乗つたらうに、何かは好かるべき。渚より三町計り漕ぎ出で、目の前にて大舟三艘沈みにけり。その後は好き武者をば乗するとも、雑人原をば乗すべからずとて、太刀長刀にて打ち拂ひけり。斯する事とは知りながら、敵に逢うては死なずして、乗せじとする舟に取り付き掴み付き、或は臂打斬られ、或は肘打落されて、一の谷の汀に、朱に成つてぞ列み臥したる。去程に、大手にも濱の手にも、武藏相模の若殿原、面も振らず命も惜まず、爰を最後と攻め戦ふ。能登殿は度々の軍に、一度も不覺し給はぬ人の、今度は如何思はれけん、薄墨と云ふ馬に打ち乗つて、西を指してぞ落ち給ふ。播磨の高砂より御船に召して、讃岐の八島へ渡り給ひぬ。

盛俊 最後

新中納言知盛の卿は、生田の森の大將軍にておはしけるが、東に向つて戦ひ給ふ處に、山のそばより寄せける兒玉黨の中より、使者を立て、「君は一年武藏の國司にて渡らせ給へば、その好を

以て、兒玉の者共が中より申し候。未だ御後をば御覽せられ候はぬやらん」と申しければ、新中納言以下の人々、後を顧み給へば、黒烟推し懸けたり。「あはや西の手は破れにけるは」と云ふ程こそありけれ、取物も取り取へず、我先にとぞ落ち行きける。越中の前司盛俊は、山の手の侍大將にてまし／＼けるが、今は落つとも叶はじとや思ひけん、扣へて敵を待つ所に、猪俣の小平六則綱、好き敵と目を懸け、鞭笠を合せて馳せ來り、押し雙べて無手と組んでどうと落つ。猪俣は八箇國に聞えたる健者也。鹿の角の一二の草かりをば、輒く引き裂きけるとぞ聞えし。越中の前司も、人目には二三十人が力顯すと云へども、内々は六七人して上げ下す舟を、たゞ一人して推し上げ推し下す程の大力也。されば猪俣を取つて押へて、動かさず、猪俣、下に臥しながら、刀を抜かうとすれども、指の股はだかつて、刀の柄を握るにも及ばず。物を云はうとすれども、餘りに強う推さへられて聲も出でず。されども猪俣は、大剛の者にてありければ、暫しの息を休めて、「敵の首を捕ると云ふは、我も名乗つて聞かせ、敵にも名乗らせて、首取つたればこそ大功なれ。名も知らぬ頸取つて、何にかはし給ふべき」と云ひければ、越中の前司實にもとや思ひけん、「本は平家の一門たりしが、身不肖なるに依つて、當時は侍になされたる、越中の前司盛俊と云ふ者也。和君は何者ぞ、名乗れ、聞かう」と云ひければ、「武藏の國の佳人、猪俣の小平六則綱と

云ふ者也。只今我が命助けさせおはしませ。さだにも候はゞ、御邊の一門、何十人もおはせよ、今度の勳功の賞に申し替へて、御命計りをば助け奉らん」と云ひければ、越中の前司大いに怒つて、「盛俊身不肖なれども、流石平家の一門也。盛俊源氏を憑まうとも思ひもよらず、源氏又盛俊に憑まれうとも、よも思ひ給はじ。悪い君が申様哉」とて、既に頸を搔かんとしければ、「正なう候。降人の頸搔く様やある」と云ひければ、さらば助けんとて赦しけり。前は堅田の畠の様なるが、後は水田のごみ深かりける畔の上に、二人ながら腰打ち懸けて、息續ぎ居たり。良あつて、緋威の鎧著て、月毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗つたりける武者一騎、鞭笠を合せて馳せ來る。越中の前司恠氣に見ければ、「あれは猪俣に親しう候ふ人見の四郎で候ふが、則綱が有るを見て、詣で來ると覺え候。苦しうも候はぬ」と云ひながら、あれが近付く程ならば、しや組まんするものを、落ち合はぬ事はよもあらじと思ひて待つ處に、交一段計りに馳せ來る。越中の前司、初めは兩人の敵を一目づ、見けるが、次第に近付く敵を、はたと守つて、則綱を見ぬ隙に、猪俣力足を踏んで立ち上り、拳を強く握り、越中の前司が鎧の胸板を、はたと突いて、後へのけに突き倒す。起き上らんとする處を、猪俣上に乗懸かり、越中の前司が腰の刀を抜き、鎧の草摺引き上げて、柄も拳も通れ／＼と三刀刺いて、首を取る。去程に人見の四郎も出で來たり。斯様の時は論する

事もありとて、聽て頸をば太刀の鋒に貫き、高く指し揚げ、大音聲を揚げて、「この日來平家の御方に、鬼神と聞えつる、越中の前司盛俊をば、武藏の國の住人、猪俣の小平六則綱が、討つたるぞや」と名乗つて、その日の高名の一の筆にぞ附きける。

忠度 最後

薩摩の守忠度は、西の手の大將軍にておはしけるが、その日の裝束には、紺地の錦の直垂に、黒絲威の鎧著て、黒き馬の太う逞しきに、沃懸地の鞍置いて、乗り給ひたりけるが、その勢百騎計りが中に打ち圍まれて、最と騒がず、扣へく落ち給ふ所に、爰に武藏の國の住人、岡部の六彌太忠純、好き敵と目を懸け、鞭鏡を合せて追つ蒐け奉り、「あれは如何に、好き大將軍とこそ見進らせて候へ。正なうも敵に後を見せ給ふ物哉。返させ給へ」と詞を懸ければ、「是は御方ぞ」とて、振り仰き給ふ内甲を見入れたれば、かね黒也。哀れ御方にかね付けたる者はなき物を、如何様にも是は平家の公達にてこそおはすらめとて、押し雙べて無手と組む。是を見て百騎計りの兵共、皆國々の驅り武者也ければ、一騎も落ち合はず、我先にとぞ落ち行きける。薩摩の守は聞ゆる熊野育ちの大力、究竟の早業にておはしければ、六彌太を颯うで、「悪い奴が、御方ぞと云は

ば云はせよかし」とて、六彌太を捕つて引き寄せ、馬の上にて二刀、落ち付く所で一刀、三刀迄こそ突かれけれ。二刀は鎧の上なれば通らず。一刀は内甲へ突き入れられたりけれども、薄手なれば死なざりけるを、取つて押へて頸を搔かんとし給ふ處に、六彌太が童、後れ馳せに馳せ来て、急ぎ馬より飛んで下り、討刀を抜いて、薩摩の守の右の肘を、臂の本よりふつと打ち落す。薩摩の守今は斯とや思はれけん、「暫し退け、最後の十念唱へん」とて、六彌太を颯うで、弓長計りぞ投げ退けらる。その後西に向ひ、「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」と宣ひも果てねば、六彌太後より寄り、薩摩の守の頸を取る。好い首討ち奉つたりとは思へども、名をば誰とも知らざりけるが、箆に結び付けられたる文を取つて見ければ、旅宿の花と云ふ題にて、歌をぞ一首讀まれたる。

行き暮れて木の下影を宿とせば、花や今宵の主ならまし

忠度と書かれたりける故にこそ、薩摩の守とは知りてけれ。聽て頸をば太刀の鋒に貫き、高く差し上げ、大音聲を揚げて、「この日來日本國に、鬼神と聞えさせ給ひたる、薩摩の守殿をば、武藏の國の住人、岡部の六彌太忠純が討ち奉つたるぞや」と名乗つたりければ、敵も御方も是を聞いて、「あないとほし、武藝にも歌道にも勝れて、好き大將軍にておはしつる人を」とて、皆鎧の袖

をぞ濡らしける。

重 衡 虜

本三位中將重衡の卿は、生田の森の副將軍にておはしけるが、その日の装束には、褐かちに白う黄なる糸を以て、岩に村千鳥縫うたる直垂に、紫下濃すそこの鎧著て、鍬形打つたる甲の緒をしめ、金作りの太刀を帶ぎ、廿四差いたる截生きりかの矢負ひ、滋藤の弓持つて、童子鹿毛どうじしかけと云ふ、聞ゆる名馬に、金覆輪の鞍置いて騎り給へり。乳母子めのとこの後藤兵衛盛長は、滋目結しげめゆひの直垂に、緋威の鎧著て、三位の中將のさしも秘藏せられたる、夜目よめ無し月毛にぞ乗せられたる。主従二騎助船なすけぶねに乗らんとて、渚の方へ落ち給ふ處に、庄しやうの四郎高家、梶原源太景季、好き敵と目を懸け、鞭むちを合せて追つ懸け奉る。渚には助舟共多かりけれども、後より敵は追つ懸けたり。乗るべき隙も無かりければ、湊河刈藻河かろもをも打ち渡り、蓮はすの池を馬手に見て、駒の林を弓手になし、板宿須磨いたどをも打ち過ぎて、西を指してぞ落ち給ふ。三位の中將は、童子鹿毛と云ふ、聞ゆる名馬に乗り給へり。もり伏せたる馬共、容易う追つ付くべしとも見えざりければ、梶原若しやと遠矢に、能つ引いて兵ひやうど放つ。三位の中將の馬の三頭さんづを、篋深のぶかに射させて弱る處に、乳母子の後藤兵衛盛長、吾が馬召されなん

とや思ひけん、鞭を打つてぞ逃げたりける。三位の中將「如何に盛長、我れをば捨て、何いくへ行いくぞ。日來は、さは契らざりしものを」と宣へども、空聞そらかずして、鎧よろいに付けたる赤印共撥り捨て、只北きたげにこそ北きたげたりけれ。三位の中將馬は弱る、海へ颯と打ち入れ給ふ。身を投げんとし給へども、其ましも遠淺にて、沈むべき様も無かりければ、腹を切らんとし給ふ處に、庄の四郎高家、鞭むちを合せて馳せ來り、急ぎ馬より飛んで下り、「正なう候、何いく迄も御供仕り候はんするものを」とて、我が乗つたりける馬に掻き乗せ奉り、鞍の前輪にしめ付け奉つて、我が身は乗替に乘つて、御方の陣へぞ入りにける。乳母子の盛長は、其まをば、なつく逃げ延びて、後には熊野法師に、尾中おなかつの法橋ほつけうを憑たのうで、居たりけるが、法橋死にての後、後家の尼公の訴訟の爲に、都へ上るに伴たりして上りたりければ、三位の中將の乳母子にて、上下多くは見知られたり。「あな憎や、後藤兵衛盛長が、三位の中將のさしも不便にし給ひつるに、一所で如何にも成らずして、思ひも寄らぬ後家尼公の供ともして、上りたるよ」とて、皆爪弾つまはじきをぞしける。盛長も流石恥しうや思はれけん、扇を顔にかざしけるとぞ聞えし。

敦 盛 最 後

去程に一の谷の軍破れにしかば、武藏の國の住人、熊谷の次郎直實、平家の公達の助舟に乗らんとて、汀の方へや落ち行き給ふらん。哀れ好き大將軍に組まばやと思ひ、細道に懸かつて落の方へ歩まする處に、爰に練緯に鶴繡うたる直垂に、萌黄匂の鎧著て、鍬形打つたる甲の緒をしめ、金作の太刀を帶き、二十四差いたる截生の矢負ひ、滋藤の弓持ち、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて、乗つたりける者一騎、冲なる船を目に懸け、海へ颯と打ち入れ、五六段計ぞ游がせける。熊谷、「あれは如何に、好き大將軍とこそ見進らせて候へ。まさなうも敵に後を見せ給ふ物哉、返させ給へ」と、扇を擧げて招きければ、招かれて取つて返し、渚に打ち上らんとし給ふ所に、熊谷浪打際にて、押し雙べ無手と組んでどうと落ち、取つて押へて頸を搔かんとて、甲を押し仰けて見たりければ、薄化粧してかね黒也。我が子の小次郎が齡程して、十六七計なるが、容顔誠に美麗なり。「抑如何なる人にて渡らせ給ひ候ふやらん。名乗らせ給へ。助け進らせん」と申しければ、「先づかう云ふ和殿は誰そ」。「物その數にては候はねども、武藏の國の住人、熊谷の次郎直實」と名乗り申す。「さては汝が爲には好い敵ぞ。名乗らずとも頸を取つて人に問へ。見知らうするぞ」とぞ宣ひける。熊谷、「哀れ大將軍や。この人一人討ち奉つたりとも、負くべき軍に勝つべき様なし。又助け奉つたりとも、勝つ軍に負くる事もよもあらじ。今朝一の谷にて、我が



子の小次郎が薄手負うたるをだにも、直實は心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲み給はんすらめ。助け進らせん」とて、後を顧みたりければ、土肥梶原五十騎計りで出で来る。熊谷涙をはら／＼と流いて、「あれ御覽候へ、如何にもして助け進らせんとは存じ候へども、御方の軍兵雲霞の如くに満ち満ちて、よも遁し進らせ候はじ。哀れ同じうは、直實が手に懸け奉つて、後の御孝養をも仕り候はん」と申しければ、「只何様にも、疾う／＼頸を取れ」とぞ宣ひける。熊谷餘りにいとほしくて、何くに刀を立つべしとも覺えず。目も昏れ心も消え果て、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く泣く頸をぞ搔いてげる。「哀れ弓矢取る身程口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに只今かゝる憂目をば見るべき。情なうも討ち奉つたる物哉」と、袖を顔に押し當て、さめ／＼とぞ泣き居たる。頸を裏まんとて、鎧直垂を解いて見ければ、錦の袋に入れられたりける笛をぞ腰に指されたる。「あないほし。此の曉城の内にて、管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。當時御方に東國の勢、何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛持つ人はよもあらし。上臈は猶も優しかりける物を」とて、是を取つて大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば、修理の大夫經盛の乙子、大夫敦盛とて、生年十七にぞ成られける。それよりしてこそ、熊谷が發心の心は出で

來にけれ。件の笛は祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽の院より下し賜られたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるに依つて、持たれりけるとかや、名をば小枝とぞ申しける。狂言綺語の理と云ひながら、遂に讚佛乘の因となるこそ哀れ也。

濱 軍

門脇殿の末子、藏人の大夫業盛は、常陸の國の住人、土屋の五郎重行と組んで討たれ給ひぬ。皇后宮の亮經正は、武藏の國の住人、河越の小太郎重房が手に取り籠め奉つて、遂に討ち奉る。尾張の守清定、淡路の守清房、若狹の守經俊、三騎つれて敵の中へ破つて入り、散々に戦ひ、分捕あまたして、一所で討死してげり。新中納言知盛の卿は生田の森の大將軍にておはしけるが、その勢皆落ち失せ討たれにしかば、御子武藏の守知章、侍に監物太郎頼方、主従三騎汀の方へ落ち給ふ處に、爰に兒玉黨と覺しくて、團扇の旗差したる者共が、十騎計り鞭鎧を合せて、押し懸け奉る。監物太郎は、究竟の弓の上手なりければ、取つて返し、先づ眞先に進んだる、旗差が頸の骨を、兵つばと射て、馬より倒に射落す。その中の大將と覺しき者、新中納言に組み奉らんとて馳せ雙ぶる處に、御子武藏の守知章、父を討たせじと、中に隔たり、押し雙べて無手と組んで、

どうと落ち、取つて押へて頸を搔き、立ち上らんとし給ふ處に、敵が童落ち合せて、武藏の守の頸を取る。監物太郎落ち重り、武藏の守討ち奉つたりける敵の童をも討ちてげり。その後、矢種の有る程射盡し、打物抜いて戦ひけるが、弓手の膝口を健に射させ、立ちも上らで居ながら討死してげり。この紛れに新中納言知盛の卿は、其をつと逃げ延びて、究竟の息長き名馬には乗り給ひぬ。海の面二十餘町泳がせて、大臣殿の御舟へぞ參られける。舟には人多く取り乗つて、馬立つべき様も無かりければ、馬をば渚へ追つ廻さる。阿波の民部重能、「御馬敵の物に成り候ひなんす。射殺し候はん」とて、片手矢番げて出でければ、新中納言「縦ひ何の者にも成らばなれ。只今我が命助けたらんする者を、有るべうもなし」と宣へば、力及ばで射さりけり。この馬、主の別を惜みつゝ、暫しは船を離れもやらず、沖の方へ泳ぎけるが、次第に遠く成りければ、空しき渚へ泳ぎ廻り、足立つ程にも成りしかば、猶船の方を顧みて、二三度迄こそ嘶きけれ。その後陸に上つて、休み居たりけるを、河越の小太郎重房、取つて院へ進らせたり。本もこの馬、院の御祕藏にて、一の御廐に立てられたりしを、一年宗盛公内大臣に成つて、悦申の有りし時、下し賜はられたりしを、弟中納言に預けられたりしかば、餘りに祕藏して、この馬の祈の爲にとて、毎月朔日毎に、泰山府君をぞ奠られける。その故にや馬の息も長う、主の命をも助けけるこそ目

出たけれ。この馬本は信濃の國井上だちにてありければ、井上黒とぞ召されける。今度は河越が取つて院へ進らせたりければ、河越黒とぞ召されける。その後新中納言知盛の卿、大臣殿の御前におはして、涙を流いて申されけるは、「武藏の守にも後れ候ひぬ。監物太郎をも討たせ候ひぬ。今は心細うこそ罷り成つて候へ。されば子は有つて父を討たせじと、敵に組むを見ながら、いかなる父なれば、子の討たるゝを助けずして、是迄遁れ參つて候ふやらん。哀れ人の上ならば、いか計りもどかしう候ふべきに、我が身の上になり候へば、よう命は惜しいものにて候ひけりと、今こそ思ひ知られて候へ。人々の思し召さん御心の中共こそ、愧しう候へ」とて、鎧の袖を顔に押し當て、さめくと泣かれければ、大臣殿「誠に武藏の守の父の命に代られけるこそ、有り難けれ。手も利き心も剛にして、好き大將軍にておはしつる人を、あの清宗と同年にて、今年は十六な」とて、御子右衛門の督のおはしける方を見給ひて、涙ぐみ給へば、その座に幾らも並み居給へる人々、心有るも心なきも、皆鎧の袖をぞ濡らされける。

落ち
足

小松殿の末子備中の守師盛は、主従七人小舟に乗り落ち給ふ處に、爰に新中納言知盛の卿の侍

に、清衛門公長と云ふ者、鞭笠を合せて馳せ來り、「あはれ如何に、備中の守の殿の、御舟とてこそ見進らせ候へ。参り候はん」と申しければ、船を渚へ棹し寄せたり。大の男の鎧者ながら、馬より船へがばと飛び乗らうに、何かは好かるべき。船は小さし、くるりと踏み返してげり。備中の守浮きぬ沈みぬし給ふ處に、畠山が郎等、本田次郎親經、主従十四五騎鞭笠を合せて馳せ來たり、急ぎ馬より飛んで下り、備中の守を熊手に懸けて引き上げ奉り、遂に御頸をぞ搔いてげる。生年十四歳とぞ聞えし。越前の三位通盛の卿は、山の手の大將軍にておはしけるが、その勢皆落ち失せ討たれ、大勢に押し隔てられて、弟能登の守には後れ給ひぬ。心靜に自害せんとて、東に向ひて落ち行き給ふ處に、近江の國の住人、佐々木の木村の三郎成綱、武藏の國の住人、玉井の四郎資景、彼是七騎が中に取り籠め進らせて、遂に討ち奉つてげり。その時迄は、侍一人付き奉つたりけれども、是も最後の時は落ち合はず。凡そ東西の木戸口時移る程にも成りしかば、源平數を盡して討たれにけり。櫓の前逆木の下には、人馬の肉山の如し。一の谷の小篠原、緑の色を引き替へて、薄紅にぞ成りにける。一の谷、生田の森、山の傍、海の汀に、射られ斬られて死ぬるは知らず。源氏の方に斬り懸けらるゝ頸共、二千餘人也。今度一の谷にて討たれさせ給へる、宗徒の人々には、先づ越前の三位通盛、弟藏人の大夫業盛、薩摩の守忠度、武藏の守知章、備中の守

師盛、尾張の守清定、淡路の守清房、經盛の嫡子、皇后宮の亮經正、弟若狹の守經俊、その弟大夫敦盛、以下十人とぞ聞えし。軍破れにければ、主上を始め進らせて、人々皆御船に召して、出でさせ給ふこそ悲しけれ。汐に引かれ風に隨ひて、紀伊路へ赴く船もあり。蘆屋の沖に漕ぎ出でて、浪に淘るゝ舟もあり、或は須磨より明石の浦傳ひ、泊定めぬ楫枕、片敷く袖もしをれつゝ、朧に霞む春の月、心を摧かぬ人ぞなき。或は淡路の瀬戸を押し渡り、繪島が磯に漾へば、波路遙に鳴き渡り、友迷はせる小夜千鳥、是も我が身の類ひ哉。行末未だ何くとも、思ひ定めぬかと覺しくて、一の谷の沖に徘徊ふ舟もあり。斯様に浦々島々に漾へば、五の死生も知り難し。國を隨ふる事も十四箇國、勢のつく事も十萬餘騎、都へ近付く事も纔に一日の道なれば、今度はさりととも慥もしうこそ思はれつるに、一の谷をも攻め落されて、いと心細うぞなれける。

小 宰 相

越前の三位通盛の卿の侍に、見田瀧口時員と云ふ者有り。急ぎ北の方の御船に参つて申しけるは、「君は今朝湊河の下にて、敵七騎が中に取り籠め進らせて、終に討たれさせ給ひ候ひぬ。中にも殊に手を下いて、討ち奉つたりしは、近江の國の住人、佐々木の木村の三郎成綱、武藏の國の

住人、玉井の四郎資景とぞ、名乗り進らせて候ひつれ。時員も一所で討死仕り、最後の御供仕るべう候ひつれども、兼てより仰せ候ひしは、通盛如何に成るとも、汝は命を捨つべからず。如何にもして存へて御行方をも尋ね進らせよと、仰せ候ひし程に、甲斐なき命計り生きて、強顔うこそ是迄參つて候へ」と申しければ、北の方鬼角の返事にも及び給はず、引き被いてぞ臥し給ふ。一定討たれ給ひぬとは聞き給へども、若し僻事にもやあるらん、生きて歸らるゝ事もやと、二日は白地に出でたる人を、待つ心地しておはしけるが、四五日も過ぎしかば、若しやの頼も弱り果て、いと心細くぞ成られける。只一人付き奉つたりける乳母の女房も、同じ枕に臥し沈みにけり。斯と聞き給ひし七日の日の暮程より、十三日の夜迄は、起きも上り給はず。明くれば十四日、八島へ押し渡る。宵打ち過ぐる迄は、臥し給ひたりけるが、更け行く儘に、船の中靜まりければ、乳母の女房に宣ひけるは、「今朝までは、三位討たれにしとは聞きしかども、實とも思はでありつるが、此の暮程より、實にさもあらんと思ひ定めてあるぞとよ。その故は皆人毎に、湊河とやらんにて、三位討たれにしとは云ひしかども、その後生きてあうたりと云ふ者一人もなし。明日打ち出でんとての夜、白地なる所にて、行き合ひたりしかば、何よりも心細げに打敷いて、明日の軍には必ず討たれんと覺ゆるはとよ。我れ如何にも成りなん後、人は如何はし給ふべ

きなど云ひしかども、軍は何もの事なれば、一定さるべしとも思はで、有りつる事こそ悲しけれ。それを限とだに思はましかば、など後の世と契らざりけんと、思ふさへこそ悲しけれ。直ならず成りたる事をも、日來は隠して謂はざりしかども、餘りに心深う思はれじとて、云ひ出だしたりしかば、斜ならず嬉しげにて、通盛三十に成る迄、子と云ふ者も無かりつるに、哀れ同じうは男子にてもあれかし、淨世の忘形見にもと、思ひ置く計り也。さて幾月にか成るらん、心地は如何あるらん、何となき波の上、船の中の栖居なれば、閑に身々と成らん時、如何はし給ふべきなど云ひしは、はかなかりける兼言哉。誠やらん女は、左様の時十に九は、必ず死ぬるなれば、愧ぢがましようたてき目を見て、空しう成らんも心憂し。靜に身々と成つて後、少き者を育て、亡き人の形見にも見ばやとは思へども、それを見ん度毎には、昔の人のみ戀しくて、思の數は増るとも、慰む事はよもあらし。終には遁れまじき道也。若し不思議にこの世を忍び過すども、心に任せぬ世の慣ひは、思はぬ外の不思議もあるぞとよ。それも思へば心憂し。目睡めば夢に見え、醒むれば面影に立つぞとよ。生きて居て兎に角に、人を戀しと思はんより、水の底へも入らばやと思ひ定めてあるぞとよ。足下に一人留つて、歎かん事こそ心苦しけれども、妾が装束の有るをば取つて、如何ならん僧にも奉り、亡き人の御菩提をも弔ひまゐらせ、妾が後生をも助け給

へ。書き置いたる文をば、都へ傳へてたべ」など、細々と宣へば、乳母の女房涙を押へて、「幼き子をも振り捨て、老いたる親をも留め置き、遙々と是迄附き進らせて侍ふ志をば、いか計りとか思し召され侍ふらん。今度一の谷にて討たれさせ給ふ、御一家の公達たちの北の方の御歎、何か疎に思し召され侍ふべき。必ず一つ蓮へと思し召され侍ふとも、生れ替らせ給ひなん後、六道四生の間にて、何れの道へか赴かせ給はんすらん。行き逢はせ給はん事も不定なれば、御身を投げて由なき御事なり。靜に身々と成らせ給ひて、如何ならん岩木の狭間にても、少き人を育て進らせ、御様を替へ、佛の御名を唱へて、亡き人の御菩提を弔ひ進らせ給へかし。その上都の御事をば、誰見續ぎ進らせよとて、斯様には仰せられ侍ふやらん。恨めしうも承り侍ふ物哉」とて、さめんと搔き口説きければ、北の方この事悪しうも知らせなんとや思はれけん、「是は心に代つても推し量り給ふべし。大方の世の恨めしさ、人の別れの悲しさにも、身を投げんなど云ふは、常の習ひなり。されども、左様の事は、有り難き様ぞかし。誠に思ひ立つ事有らば、足下に知らせずしては、有るまじきぞ。今は夜も更けぬ、いざや寝ん」と宣へば、乳母の女房、この四五日は湯水をだに、はかしくしう御覽じ入れさせ給はぬ人の、斯様に細々と仰せらるゝは、誠に思し召し立つ事もやと、悲しうて、「凡そは都の御事も、さる御事にて侍へども、實に思し召し立

つ事ならば、妾をも千尋の底迄も、引きこそ具せさせ給はめ。後れ進らせなん後、更に片時存らふべしとも覺えぬ者哉」と申して、御傍に在りながら、些と打ち目睡みたりける隙に、北の方やはら舩へ起き出で給ひて、漫々たる海上なれば、何地を西とは知らねども、日の入るさの山の端を、其方の空とや覺しけん、閑に念佛し給へば、沖の白洲に鳴く千鳥、天の戸渡る楫の音、折から哀や勝りけん、忍び聲に念佛百返計り唱へさせ給ひつゝ、「南無西方極樂世界の教主、彌陀如來、本願誤たず、飽かて別れし妹背のなからひ、必ず一つ蓮に」と、泣く／＼遙に搔き口説き、南無と唱ふる聲共に、海にぞ沈み給ひける。一の谷より八島へ押し渡らんとての、夜半計りの事也ければ、舟の中靜まつて、人は知らざりけり。その中に楫取の一人寝ざりけるが、この由を見奉つて、「あれは如何に、あの御舟より、女房の海へ入らせ給ひぬるは」と呼はつたりければ、乳母の女房打驚き、傍を搜れどもおはせざりければ、唯あれよあれとぞあきれける。人數多下りて、取り揚げ奉らんとしけれども、さらぬだに、春の夜は、習ひに霞むものなれば、四方の村雲浮れ來て、被けども／＼、月朧にて見え給はず。遙に程經て後、取り上げ奉りたりけれども、早この世になき人と成り給ひぬ。白き袴に練貫の二つ衣を著給へり。髪も袴も、しほたれて、取り上げけれども、甲斐ぞなき。乳母の女房手に手を取り組み、顔に顔を押し當て、「などや是程に思し召

し立つ事ならば、妾をも千尋の底迄も、引きこそ具せさせ給ふべけれ。恨めしうも、只一人留めさせ給ふもの哉。さるにても今一度物仰せられて、妾に聞かせ給へ」とて、悶え焦れけれども、早この世に無き人と成り給ひぬる上は、一言の返事にも及び給はず、纔に通ひつる息も、はや絶え果てぬ。去程に春の夜の月も、雲井に傾き、霞める空も明け行けば、名残は盡きせず思へども、さてしもあるべき事ならねば、浮きもや上り給ふと、故三位殿の着背の一領残つたるを、引き纏ひ奉り、終に海にぞ沈めける。乳母の女房、今度は後れ奉らじと、續いて海に入らんとしけるを、人々取り留めければ、力及ばず。責めての心のあられずさにや、手づから髪をはさみ下し、故三位殿の御弟、中納言の律師忠快に刺らせ奉り、泣くく戒を保つて、主の後世をぞ弔ひける。昔より男に後るゝ類多しと云へども、様を替ふるは常の習、身を投ぐる迄は有り難き様也。されば忠臣は二君に仕へず、貞女は二夫に見えずとも、斯様の事をや申すべき。此の女房と申すは、頭の刑部卿範方の女、禁中一の美人、名をば小宰相殿とぞ申しける。上西門院の女房也。この女房十六と申し、安元の春の比、女院法勝寺へ花見の御幸の有りに、通盛の卿、その比は未だ中宮の亮にて、供奉せられたりけるが、見初めたりし女房也。始めは歌を詠み、文を盡されけれども、玉章の數のみ積つて、取り入れ給ふ事もなし。既に三年に成りしかば、通盛の卿今を限りの

文を書いて、小宰相殿の許へ遣す。剩へ取り傳へける女房にだに逢はずして、使空しう歸りける道にて、折節小宰相殿は、里より御所へぞ参られける。使空しう歸り参らん事の本意なきに、傍をつと走り通る様にて、小宰相殿の乗り給へる車の簾の中へ、通盛の卿の文をぞ投げ入れたる。供の者共に問ひ給へば、知らずと申す。さて彼の文を開けて見給へば、通盛の卿の文也けり。車に置くべき様もなし、大路に捨てんも流石にて、袴の腰に挟みつゝ、御所へぞ参り給ひける。さて宮仕へ給ひし程に、所しもこそ多けれ、御前に文を落されたり。女院これを取らせおはし、急ぎ御衣の袂に引き藏させ給ひて、「珍しき物をこそ求めたれ。この主は誰なるらん」と仰せければ、御所中の友房達、萬の神佛に懸けて、知らずとのみぞ申しける。その中に小宰相殿計り、顔打ち赤めて、つや／＼物も申されず。女院も内々通盛の卿の申すとは、知し召されたりければ、さてこの文を披けて御覽すれば、綺爐の烟の匂殊に深きに、筆の立ども尋常ならず。「餘りに人の心強きも、今は中々嬉しくて」など、細々と書いて、奥に一首の歌ぞありける

我が戀は細谷川のまろき橋、ふみ返されてぬるゝ袖かな

女院、「是は逢はぬを恨みたる文や。餘り人の心強きも、中々今は怨となん成るものを」中比小野の小町とて、眉目容嚴しう、情の道有り難かりしかば、見る人聞く者、肝魂を傷ましめすと云ふ

事なし。されども心強き名をやりたりけん、終には人の思ひの積とて、風を防ぐ便りもなく、雨を漏さぬ業もなし。宿に曇らぬ月星は、涙に浮び、野邊の若菜、澤の根芹を摘みてこそ、露の命をば過しけれ。女院「是は如何にも返事有るべき事ぞ」とて、御視召し寄せて、忝くも自ら御返事遊ばされけり。

只頼め細谷川のまる木橋、ふみ返しては落ちさらめやは

胸の中の思は、富士の烟に顯はれ、袖の上の涙は、清見が關の浪なれや。眉目は幸の花なれば、三位この女房を賜つて、互の志淺からず。されば西海の浪の上、舟の中迄も引き具して、終に同じ道へぞ赴かれける。門脇の中納言は、嫡子越前の三位の末子、業盛にも後れ給ひぬ。今頼み給へる人としては、能登の守教經、僧には中納言の律師忠快計り也。故三位殿の信とも、この女房をこそ見給ふべきに、それさへ斯様に成り給へば、いと心細うぞ成られける。

平家物語 中編終

昭和十年六月二十六日印刷
昭和十年六月三十日發行

いてふ本 定價 金五拾錢
平家物語中

編輯者 三教書院編輯部

代表者 鈴木種次郎

發行者 東京市中野區高根町六番地 鈴木種次郎

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地 白井赫太郎

印刷所 東京市神田區錦町三丁目十一番地 精興社

發行所

東京市中野區高根町六番地

三教書院

營業所

電話中野二八〇四番
振替東京四五八〇番
東京市神田區錦町一ノ一八番
電話神田二四〇八番

不許
複製

67
415

いてふ本刊行の辭

現今の讀書界が嘗ての諸外來思想偏重より
 翻つて、漸く自國の過去に於ける產物に對
 して新たに注目し始めた事は、當然の推移
 とは云へ喜ぶべき現象である。顧みて現時
 の我國出版界を見るに、日々發行される書
 物の如何に多いかは暫く措き、所謂實際に
 類するものが非常に多く、やゝ見るべきも
 のは概して高價なる爲一般的でないか、或
 は豫約出版等により讀者の自由選擇を拒否
 するが如きものが多い。弊院は右の缺陷を
 除く意味より、此度多大の犠牲を覚悟して、
 内容・装帧・價格の點に於ては、絶対に他の
 追従を許さざる『いてふ本』の刊行を企て
 た。蒐むるところ、古典といはず、輕文學
 といはず、雅といはず、俗といはず、韻文
 といはず、散文といはず、過去の日本が産
 める文藝作物の一切はもとより、必ずしも
 本邦を範圍とせず、漢籍中必讀のものを選
 み、必ずしも文藝を範圍とせず、經世修養
 其他の書を選び、廣く讀書界に提供し以て
 現下の缺陷を補はむとす。大方の御支持を
 期待して已まない所以である。

昭和十年五月

三教書院主

いてふ本書目

昭和十年
六月中華のもの

古	事	記	全	武	經	七	書	全
萬	葉	集	上下	唐	詩	選	全	
枕	草	子	全	三	體	詩	全	
平	家	物語	上中下	會	我	物語	上下	
徒	然	草	全	兩	月	物語	全	
神	皇	正統	記	附	世間	猿	諸道	全
附	吉	野	拾	遺	日	蓮	大士	眞實
近	松	心	中物	全	新	編	水滸	畫傳
西	鶴	物	全	東	海	道	中	陸栗
俳	諧	七部	集	全	修	紫	田	舍源
蕪	村	七部	集	全	釋	迦	八	相倭
武	將	感	狀	記	全	い	ろ	は
								文庫
								上下

和裝の表紙は始めに絲の綴目の處にしつか
 りと折り目を付けて下さい。さうすれば表
 紙に皺がよらず耐久力は殆ど永久的です。



終

